張籍詩訳注（14）

――「関山月」「少年行」――

畑村　学
橘　英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote（14）

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

要旨　本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注（14）である。本篇には、27「関山月」・28「少年行」（ともに中華書局『張籍詩集』巻一）の訳注を掲載する。

訳注

27関山月

【題解】

関所のある山にかかる月。『楽府詩集』巻二三に横吹曲辞として採録される。郭茂倩『楽府解題』には次のように言う。

「関山月」、傷離別也。古「木蘭詩」曰、「万里赴戎機、関山度若飛。朔気伝金柝、寒光照鉄衣」。按相和曲有「度関山」、亦此類也。

「関山月」は、離別を傷むなり。古「木蘭詩」に曰く、「万里　戎機に赴き、関山　度ること飛ぶが若し。朔気　金柝を伝え、寒光　鉄衣を照らす」と。按ずるに　相和曲に「度関山」有るも、亦た此の類なり。

『解題』の後には、以下に挙げる二一人の作者の同題楽府二三首が収められている。

梁・元帝
陳・後主二首／陸瓊／張正見／徐陵二首／賀力牧／阮卓／江総
北周・王褒
唐・盧照隣／沈佺期／李白／長孫左輔／耿湋／戴叔倫／崔融／李端／王建／張籍／翁綬／鮑氏君徽

『解題』に「離別を傷むなり」というように、これらの作品の内容は、辺地に出征した兵士が、関所のある山にかかる月を見て故郷を懐かしむというものがほとんどである。

なお、楽府「関山月」に限らず、詩中で「関山」や国境の関所が詠われる場合、月が一緒に詠われるケースが非常に多く見られる。「関山月」の三字の並びでも詩語として用例が見え、有名な王昌齢の「従軍行七首」其一（『全

二〇〇五年十一月二十四日（受理）

畑村　学　宇部工業高等専門学校一般科助教授
橘　英範　岡山大学文学部言語文科学科助教授

唐詩』巻一四三）にも、「更吹羌笛関山月、無那金閨万里愁」（更に羌笛を吹く　関山の月、那んともする無し　金閨万里の愁い）とあり、出征兵士が「関山月」の曲を聞くことで遠い故郷で自分を待つ妻のことを思い出すと詠われている。このように、関山と月が結びつくのは、ひとつには楽府「関山月」の影響があろうが、それ以外に、故郷から遠く離れた関山と故郷を結ぶ媒介としての月は、王昌齢の詩に顕著なように、望郷の心情を詠ずる際に結びつきやすい素材であったと言えよう。

楽府「関山月」における張籍の詩の特徴については、【補】のところで指摘することにしたい。なお、『解題』が指摘する「度関山」（相和歌辞）には下記のものが収められている。

魏・文帝
梁・簡文帝／戴暠／柳惲／劉遵／王訓
陳・張正見
唐・李端／馬戴（一作「関山曲」）

【本文・書き下し文】

1 秋月明朗關山上　秋月　明朗たり　関山の上
2 山中行人馬蹄響」　山中の行人　馬蹄響く
3 關山秋來雨雪多　関山　秋来たりて　雨雪多く
4 行人見月唱邊歌」　行人　月を見て　辺歌を唱う
5 海邊茫茫天氣白　海辺　茫茫として　天気白く
6 胡兒夜度黃龍磧　胡児　夜に黄竜の磧を度る
7 軍中探騎暮出城　軍中の探騎　暮に城を出で
8 伏兵暗處低旌戟」　伏兵　暗に処りて　旌戟を低くす
9 沙磧連天霜草平　沙磧　天に連なりて　霜草平かに
10 野駝尋水磧中鳴　野駝　水を尋ねて　磧中に鳴く
11 隴頭風急雁不下　隴頭　風急にして　雁下らず
12 沙場苦戰多流星」　沙場の苦戦　流星多し
13 可憐萬里關山道　憐むべし　万里　関山の道
14 年年戰骨多秋草」　年年の戦骨　秋草よりも多きを

【口語訳】

1 秋の月が　関所のある山の上に明るく輝き
2 山中をゆく旅人は　馬の足音を響かせて進んでいる
3 関所の山に秋が訪れ　雨や雪がしきりに降るこの季節
4 旅人は月を見て故郷を思い　辺塞の歌を唱うのだ
5 海は遥か彼方まで広がっており　空の気は月光で白々と光っている
6 胡どもは　こんな夜に黄竜の砂漠を渡ってやってくる
7 軍の偵察兵の乗る馬が　日暮れに城塞を出発し
8 伏兵は暗闇に身を潜め　旗やほこを低く構えている
9 砂漠は天に連なるように続き　霜枯れした草は一面に広がっており
10 野生のラクダは水を求め　砂漠で鳴いている
11 砂丘は風が強いため　雁も下りてこない
12 砂漠では苦戦を強いられて　その間流星がいくつも通り過ぎることだろう
13 なんとも不憫だ　万里も続く関所の山道に
14 毎年の戦死者の骨が　秋の草よりも多く転がっているとは

【押韻】

上・響―上声三六養
多・歌―下平七歌
白・戟―入声二〇陌　磧―入声二二昔（同用）
平・鳴―下平一二庚　星―下平一五青（古詩通押）
道・草―上声三二皓

【語釈】

1・2　秋月明朗関山上、山中行人馬蹄響

〔秋月〕秋の月。『毛詩』や『楚辞』にはまだ現れないが、六朝の詩文には大量に使われるようになる。晋の顧愷之「神情詩」（『藝文類聚』巻三）に、「秋月揚明輝、冬嶺秀寒松」（秋月　明輝を揚げ、冬嶺　寒松秀づ）とあり、また謝霊運「隣相送方山詩」（『文選』巻二〇）に、「析析就衰林、皎皎明秋月」（析析として衰林に就き、皎皎として秋月に明らかなり）とある。同題楽府では、陳の後主の詩に「秋月上中天、迴照関城前」（秋月　中天に上り、迴かに照らす　関城の前）とある他、唐の長孫左輔の作に「何処最傷心、関山見秋月」（何の処か　最も心を傷ましむ、関山　秋月を見る）、鮑氏君徽の作に「高高秋月明、北照遼陽城」（高高　秋月明らかに、北のかた遼陽城を照らす）と見える。

同題楽府以外にも、初唐から多くの用例がある。ここでは杜甫の用例を一つ挙げておこう。「寄李十二白二十韻」（『詳注』巻八）に、「老吟秋月下、病

起暮江浜」（老いて吟ず　秋月の下、病みて起く　暮江の浜）とある他、杜甫には三例見える。張籍にこの他一例、79「夜宿黒竜渓」（巻二）に、「夜到碧谿裏、無人秋月明」（夜　碧谿裏に到り、人無く　秋月明るし）とある。

〔明朗〕月が明らかなさま。

月の明るいさまを表現する例としては、晋の王述「慶老人星表」（『藝文類聚』巻一）に、「老人星見、光色明朗」（老人星見れ、光色明朗なり）とある。詩では、梁の戴暠「月重輪篇」（同巻四二）に、「皇基属明朗、副徳表重輪」（皇基　明朗に属し、副徳　重輪に表る）とあるのは、月の明るいことを言う。六朝期の詩に同様の意味での用例はほとんどない。

唐詩において、ここ以外で二字の熟語としての用例は見当たらない。

楽府詩集・全唐詩・四庫全書・静嘉堂本は「朗朗」に作り、全唐詩は「一作明」とする。「朗朗」でも意味は同じ。陳注本は「朗朗」に作り、『世説新語』容止篇に、「時人目、夏侯太初『朗朗如日月之入懐』、李安国『頽唐如玉山之将崩』」（時人目す、夏侯太初は「朗朗たること日月の懐に入るが如し」、李安国は「頽唐として　玉山の将に崩れんとするが如し」と）とあるのを引いている。

六朝詩にはほとんど用例がないが、支遁「四月八日讃仏詩」（『広弘明集』巻三〇）に、「祥祥令日泰、朗朗玄夕清」（祥祥として　令日泰かに、朗朗として　玄夕清らかなり）とあるのは、恐らくは月の様子を表現している。唐詩では、中唐に入り詩の中で頻用されるようになるが、多くは音が響き渡るさまを表す意味で使われている。張籍と同じく月の明るさを表す例としては、張籍と同時代で韓愈や孟郊と交遊のあった鮑溶「秋懐五首」其五（『全唐詩』巻四八五）に、「翩翩日斂照、朗朗月繫夕」（翩翩として　日は照（ひかり）を斂め、朗朗として　月は夕べに繫かる）とある。中唐以降はもっぱら月の様子を表す言葉として使われるようだ。

〔関山〕国境の関所がある山。

唐代以前の詩に多くの用例がある。漢の蔡琰の作に擬せられる「胡笳十八拍」其一七（『古詩紀』巻一四）に、「十七拍兮心鼻酸、関山阻修兮行路難」（十七拍　心鼻酸し、関山は阻修にして行路は難し）とある。作者が確かなものでは、魏の武帝曹操の詩の題に「度関山」（『宋書』楽志）とあるのが最初。ただし、曹操の作は、後世の「関山月」や「度関山」のように、出征兵士の悲しみが主題となっていない。張籍と同様の関山のイメージを持った用例としては、謝朓「暫使下都夜発新林至京邑贈西府同僚」（『文選』巻二六）に、「徒念関山近、終知反路長」（徒らに関山の近きを念い、終に反路の長きを知る）とあり、李善注に「古楽府有『度関山曲』。王粲『閑邪賦』曰、『関山介而阻険』」（古楽府に『度関山曲』有り。王粲『閑邪賦』に曰く、『関山介して阻険なり』と）と言う。

唐詩においても、同題楽府以外にも初唐から非常に多くの用例がある。それらの多くが戦地、辺塞、故郷や都から遠く離れた場所、望郷などと関連して使われている。杜甫にも用例が一三例あり、「洗兵馬」（『詳注』巻六）に、「三年笛裏関山月、万国兵前草木風」（三年　笛裏　関山の月、万国　兵前　草木の風）とあるのは、三年もの間戦争が続いたことを、聞こえてくる笛の音が「関山月」という出征兵士を主人公とした歌詞であったということで表現している。また、「寄張十二山人彪三十韻」（『詳注』巻八）に、「鼓角凌天籟、関山倚月輪」（鼓角　天籟を凌ぎ、関山　月輪に倚る）とあり、「吹笛」（『詳注』巻一七）に、「風飄律呂相和切、月傍関山幾処明」（風は律呂を飄して　相和すること切に、月は関山に傍いて　幾処か明らかなる）とある。後者は横吹曲である楽府「関山月」を踏まえた表現である。

陳注は、戴叔倫の同題楽府二首其一に、「月出照関山、秋風人未還」（月出でて　関山を照らし、秋風　人未だ還らず）とあるを引く。

張籍にはここ以外に「関山」の用例はない。

〔行人〕旅人。ここでは出征兵士を指して言う。張籍の3「雑怨」（巻一）に、「山川豈遥遠、行人自不返」（山川　豈に遥かに遠からんや、行人　自（みずか）ら返らず）とあった。その【語釈】を参照。張籍にはこれ以外にも用例が見え、この詩と同じく出征兵士を指して用いる例としては、14「別離曲」（巻一）に、「行人結束出門去、幾時更踏門前路」（行人結束して　門を出でて去る、幾時か更に踏む　門前の路）とあった。

張籍の詩と同様、同題楽府の多くに一人の旅人（出征兵士）が登場する。征戍客（陳の後主二首其一）、客子（徐陵二首其一）、離郷客（賀力牧）、遊客（王褒）、戍客（李白・耿湋）、征人（崔融）、征人（鮑氏君徽）など。

〔馬蹄〕馬のひづめ。ここでは馬の足音。

張籍の14「別離曲」（第2句の異文）、19「各東西」、24「傷歌行」（以上巻一）に見えた。それらの【語釈】を参照。それらで指摘したように、早くは曹植「白馬篇」（『文選』巻二七）に、「仰手接飛猱、俯身散馬蹄」（手を仰いで　飛猱に接し、身を俯して　馬蹄を散らす）と見えるが、曹植の詩の馬蹄は、李善注に拠れば馬射に用いる的の名であるとされる。

以上の二句がひとまとまりで、関所のある山の上に冴え冴えとした月が照

るなか、一人の出征兵士が馬に乗って進む様子が詠われる。ここに出てくる「行人」は、7句の偵察兵と同じ人物であり、一人城塞を離れ敵の様子をうかがうために関山の上を進んでいるのであろう。

3・4　関山秋来雨雪多、行人見月唱辺歌

〔雨雪〕雨と雪。

二字の並びで古くから用例のある言葉。『毛詩』邶風「北風」に、「北風其涼、雨雪其雱」（北風　其れ涼なり、雪雨ること　其れ雱たり）とある他、いくつか用例が見える。正義に拠れば、『毛詩』中の「雨雪」の「雨」字は、いずれも動詞として解釈するようだ。六朝・唐代の詩にも多くの用例があり、「雨と雪」の意味で用いられる例も数多く見られるようになる。この詩と類似した例を挙げれば、初唐の杜審言「贈蘇味道」（『全唐詩』巻六二）に、「雨雪関山暗、風霜草木稀」（雨雪　関山暗く、風霜　草木稀なり）とあるのは、張籍の詩と同じく「関山」とともに用いられている。また、鄭愔「胡笳曲」（『全唐詩』巻一〇六）に、「曲断関山月、声悲雨雪陰」（曲は関山の月を断ち、声は雨雪の陰に悲し）とあるのは、「関山月」と一緒に用いられた例である。杜甫にもいくつか用例があり、辺塞での兵士の労苦を詠じた「前出塞九首」其七（『詳注』巻二）に、「駆馬天雨雪、軍行入高山」（馬を駆れば天は雪を雨らし、軍行きて　高山に入る）とあり、また、「贈韋七贊善」（『詳注』巻二三）に、「北走関山開雨雪、南遊花柳塞雲烟」（北走すれば　関山に雨雪開け、南遊すれば　花柳に雲烟塞がる）とあるのは、「関山」と一緒に使われた例である。張籍にはこの一例のみ。

〔辺歌〕辺塞詩。出征兵士が従軍の苦労や望郷の念を歌った歌。

六朝詩には用例がない。唐詩中にも詩語としての用例はないが、高適の「陪竇侍御霊雲南亭宴詩得雷字并序」（『全唐詩』巻二一）の序文に、「雨蕭蕭而牧馬声断、風嫋嫋而辺歌幾処、又足悲矣」（雨蕭蕭として牧馬は声断え、風嫋嫋として辺歌幾処ぞ。又悲しむに足る）と見える。

徐注では、「辺歌」は「出塞」「入塞」「関山月」等の楽府を指すとし、李冬生注は「辺塞の音楽」の意として、李陵「答蘇武書」（『文選』巻四一）に、「吟嘯成群、辺声四起」（吟嘯　群を成し、辺声　四に起こる）とあるのを引いている。この場合、「辺声」は胡人の笛の音や胡人の歌声など、匈奴に捕らえられた李陵に夷狄の地であることを感じさせるものとして記されている。

この二句でひとまとまりで、冒頭の二句に引き続いて出征兵士を客観的に詠う。秋の訪れた辺塞では冷たい雨や雪のために、普段月を見ることはない。しかし今日はたまたま月が出ており、その月を見たことで遠い故郷を思い出し、出征の苦労を唱うのである。

5・6　海辺茫茫天気白、胡児夜度黄竜磧

〔海辺〕海のほとり。「海」は辺境地帯や砂漠のなかにある湖で、辺塞詩によく登場する。いちいち挙げないが、同題楽府にも「海」を詠じたものは多い。

詩語としては六朝詩にほとんど用例がないが、唐代に入ると初唐から用例が見られるようになる。張九齢「与王六履震広州津亭暁望」（『全唐詩』巻四八）に、「水紋天上碧、日気海辺紅」（水紋　天上碧く、日気　海辺紅し）とある。岑参の辺塞詩にもいくつか用例が見え、「熱海行送崔侍御還京」（『校注』巻二）に、「送君一酔天山郭、正見夕陽海辺落」（君を送りて一たび天山の郭に酔い、正に見る　夕陽の海辺に落つるを）とあるのは、詩題にある熱海（旧ソ連吉爾吉斯にある伊塞克湖）のほとりを指す。また、「首秋輪臺」（『校注』巻二）にも、「異域陰山外、孤城雪海辺」（異域　陰山の外、孤城　雪海の辺り）と「雪海の辺」と見える。この他、李白の「行行遊且猟篇」（王琦注本巻三）にも、「海辺観者皆辟易、猛気英風振沙磧」（海辺観る者　皆辟易し、猛気英風　沙磧に振るう）とあり、辺境の少年の血気盛んなさまを言うなかに見える。

杜甫にも一例、「奉送蘇州李二十五長史丈之任」（『詳注』巻二一）に、「赤壁浮春暮、姑蘇落海辺」（赤壁　春暮に浮かび、姑蘇　海辺に落つ）とあるのは、実際の海を指していう。張籍にはこの一例のみ。

なお、李白の同題楽府に、「漢下白登道、胡窺青海湾」（漢は下る　白登の道、胡は窺う　青海の湾）と見える。後にも引く杜甫「兵車行」（『詳注』巻二）に、「君不見青海頭、古来白骨人無収」（君見ずや　青海の頭、古来白骨人の収むる無し）とある有名な句も、張籍の念頭にはあったかもしれない。

〔茫茫〕遠く彼方まで広がるさま。

古く『毛詩』商頌「長発」に、「洪水芒芒、禹敷下土方」（洪水芒芒たり、禹　下土の方に敷く）とあるのは、洪水が地上を果てしなく覆い尽くすこと。「芒芒」は「茫茫」に同じ。『楚辞』九章「悲回風」にも、「穆眇眇之無垠兮、莽芒芒之無儀」（穆として眇眇として　之れ垠無く、莽りて芒芒として　之れ儀無し）とあり、草原が広がるさまを言う。

六朝詩に多くの用例が見える。「古詩十九首」其一一（『文選』巻二九）に、「四顧何茫茫、東風揺百草」（四顧すれば　何ぞ茫茫たる、東風　百草を揺

らす）とあるのは古い用例の一つ。魏文帝曹丕の「折楊柳行」（『楽府詩集』巻三七）にも、「流覧観四海、芒芒非所識」（流覧して　四海を観るも、芒芒として　識る所に非ず）とあり、四海が広がるさまを言い、阮籍「詠懐詩十七首」其一二（『文選』巻二三）に、「緑水揚洪波、曠野莽茫茫」（緑水　洪波を揚げ、曠野　莽として茫茫たり）とあるのは、野原が遥か彼方まで続くさまを言う。

唐詩にも多くの用例がある。ここでは杜詩の用例を挙げよう。杜甫にも多くの用例があり、「城上」（『詳注』巻一三）に、「風吹花片片、春動水茫茫」（風吹きて　花片片とし、春動きて　水茫茫たり）とあるのは水面が広がるさまを言い、「南池」（『詳注』巻一三）に、「干戈浩茫茫、地僻傷極目」（干戈　浩として茫茫たり、地僻にして　極目傷む）とあるのは、地上の至る所で戦争が行われている様子を表現する。

張籍にはこの他八例、128「送安西将」（巻二）に、「万里海西路、茫茫辺草秋」（万里　海西の路、茫茫たり　辺草の秋）とあるのは辺塞の風景を詠じたなかに用いられている例。

陳注は、『春秋』襄公四年「左伝」に、「芒芒禹迹、画為九州」（芒芒たる禹迹、画して九州と為す）とあるのを引いている。禹が巡り歩いた広大な土地を表現する。

唐文粋・楽府詩集・四庫全書・静嘉堂本は「漠漠」に作る。意味としては、「茫茫」と同じく広々と果てしないさまを言うのであろう。

陸機「君子有所思行」（『文選』巻二八）に、「廛里一何盛、街巷紛漠漠」（廛里　一に何ぞ盛んなる、街巷　紛として漠漠たり）とあり、大小の通りが長く続くさまを表現する。

その他六朝・唐代を通じて多くの用例がある。杜甫にも用例が多く、一例として、「入喬口」（『詳注』巻二二）に「漠漠旧京遠、遅遅帰路賒」（漠漠として　旧京遠く、遅遅として　帰路賒かなり）とある。張籍にこの他三例、一例として281「野田」（巻五）に「漠漠野田草、草中牛羊道」（漠漠たり　野田の草、草中　牛羊の道あり）とあるのは、草原が一面に広がるさまを言う。

〔天気〕空の様子。空の雰囲気。

古く『礼記』月令の孟春の項に、「是月也、天気下降、地気上騰」（是の月や、天気下降し、地気上騰す）とある。六朝詩では、魏武帝「歩出夏門行」（『宋書』楽志）に、「天気粛清、繁霜霏霏」（天気粛清にして、繁霜霏霏たり）とあり、魏文帝の「燕歌行」（『文選』巻二七）にも、「秋風蕭瑟天気涼、草木揺落露為霜」（秋風蕭瑟として　天気涼し、草木揺落して　露は霜と為る）とある等、六朝詩に多くの用例がある。唐詩にも多くの用例がある。杜甫にも三例、一例として「発秦州」（『詳注』巻八）に、「漢源十月交、天気如涼秋」（漢源　十月の交、天気　涼秋の如し）とある。張籍にはこの他二例、419「江村行」（巻七）に、「江南熱旱天気毒、雨中移秧顔色鮮」（江南の熱旱　天気毒あり、雨中に移秧して　顔色鮮し）とあり、119「春日李舎人宅見両省諸公唱和因書情即事」（巻二）に、「又見帝城里、東風天気和」（又帝の城里を見るに、東風　天気和す）とある。

「天気白」について、李冬生注では、月光が昼のように明るいことを言うとし、張説「夕宴房主簿舎詩序」（『全唐詩』巻八六）に、「巌雲暗山、微月白夜」（巌雲　山を暗くし、微月　夜を白くす）とあるを引く。同題楽府では、王褒の作に「天寒光転白、風多暈欲生」（天寒くして　光は白を転じ、風多くして　暈は生ぜんと欲す）とあり、王建の作に「関山月、営開道白前軍発」（関山の月、営は開きて道は白く　前軍発す）とある。前者は月そのものを指し後者は月光によって夜道が白く浮かんでいるさまを表現する。

〔胡児〕異民族。えびすども。22「永嘉行」（巻一）に、「黄頭鮮卑入洛陽、胡児執戟升明堂」（黄頭の鮮卑　洛陽に入り、胡児　戟を持ち　明堂に升る）と見えた。その【語釈】を参照。同題楽府では、「胡兵」（阮卓、江總、王褒）等と見えた。

〔黄竜〕地名。「磧」は砂漠。陳注に「辺地　沙磧多し。故に云う」と言う。徐注では二つの場所の可能性を指摘する。①今の吉林省及び遼寧の東北一帯の地で、遼・金代の黄竜府が置かれた所。故城は今の吉林省農安県である。②五胡十六国の北燕の都城を竜城と言い、又の名を黄竜国と言う。旧熱河省朝陽県（今の遼寧省朝陽）である。①②ともに塞外の地であり、この詩の場合、砂漠の近くということで②である可能性が高いとする。

六朝・唐代の詩の「黄竜」の用例を見た場合、中国東北部の匈奴との国境地帯というイメージがあるようだ。六朝の詩では、梁の蕭子顕「燕歌行」（『玉臺新詠』巻九）に、「遥看白馬津上吏、伝道黄竜征戍児」（遥かに看る　白馬津上の吏、伝え道う　黄竜の征戍児）と、黄竜の地に出征している人（この場合語り手である女性の夫）が詠われる他、梁の元帝の「燕歌行」（『藝文類聚』巻四二）に、「黄竜戍北花如錦、玄菟城前月似蛾」（黄竜戍の北　花は錦の如く、玄菟城の前　月は蛾に似たり）とある。唐詩では、初唐の沈佺期「雑詩三首」其三（『全唐詩』巻九六）に、「聞道黄竜戍、頻年不解兵」（聞道（きくな）らく　黄竜の戍、頻年　兵を解かず、と）と、戦地として黄竜が詠われ、王維「楡林郡歌」（趙注本巻六）にも、「黄竜戍上游侠児、愁逢漢使不相識」（黄竜戍上　游侠の児、愁えて漢使に逢いて相識らず）とある。李白「独不見」

（王琦注本巻四）に、「白馬誰家子、黄竜辺塞児」（白馬　誰が家の子ぞ、黄竜　辺塞の児）とあるのは、黄竜の守備に行く兵士を詠じている。

杜甫には地名としての用例はない。張籍にもこの一例のみ。

なお、陳注では、庾信「周上柱国斉王憲神道碑」（『庾子山集注』巻一三）に、「晋太康之世、拠有黄竜」（晋の太康の世、拠りて黄竜有り）とあるのを引いている。

7・8　軍中探騎暮出城、伏兵暗処低旌戟

〔探騎〕敵を偵察する騎兵。

張籍以前の詩に用例がなく、張籍もこの一例のみ。張籍より後では、晩唐の張喬「塞上」（『全唐詩』巻六三八）に、「雪晴迴探騎、月落控鳴弦」（雪晴れて　探騎を迴らし、月落ちて　鳴弦を控（ひ）く）とあり、曹松「送左協律京西従事」（同巻七一六）に、「時平無探騎、秋静見盤鵰」（時平かにして　探騎無く、秋静かにして　盤鵰を見る）とあるなど、いくつか用例が見える。

なお、この詩と同じく辺塞を詠った張籍417「塞上曲」（巻七）には、「辺州八月修城堡、侯騎先焼積中草」（辺州八月　城堡を修め、侯騎先ず焼く　積中の草）と、「候騎」の語が見える。意味は「探騎」に同じ。

〔伏兵〕待ち伏せして敵を襲撃する兵士。

『史記』匈奴伝に、「漢伏兵三十餘万馬邑旁、御史大夫韓安国為護軍、護四将軍以伏単于」（漢　兵三十餘万を馬邑の旁らに伏し、御史大夫韓安国を護軍と為し、四将軍を護して以て単于に伏せしむ）とある他、史書にはよく見られる言葉だが、詩では唐代以前に用例がない。唐詩では、初唐の劉希夷「従軍行」（『全唐詩』巻八二）に、「巌城昼不開、伏兵暗相失」（巌城　昼開かず、伏兵　暗に相失う）とあり、李益「送韓将軍還辺」（『全唐詩』巻二八三）に、「独将軽騎出、暗与伏兵期」（独り軽騎を将いて出で、暗に伏兵と期す）とあり、また于鵠「出塞」（『全唐詩』巻三一〇）に、「度水逢胡説、沙陰有伏兵」（水を度りて胡の説（よろこ）ぶに逢い、沙陰に伏兵有り）とある。

杜甫には用例がない。張籍にもこの一例のみ。

〔暗処〕徐注に、「処」は上声で、動詞として用いていると説明する。その場合、「暗に処（お）る」となろう。

〔旌戟〕戦争で使う旗と矛。「旌」は、牛の尾や鳥の羽で飾った旗。「戟」は柄の先端に着けた刃が二股に分かれている矛。「旌戟を低くす」は奇襲攻撃をしかけるために備える目的と、徐注が言うように、敵に見つかるのを恐れて隠れる目的との二つがあるだろう。

唐代以前の古い用例が見当たらない。陳注は、沈佺期「和崔正諫登秋日早朝」（『全唐詩』巻九六）に、「爽気臨旌戟、朝光映冕旒」（爽気　旌戟に臨み、朝光　冕旒に映ず）とあるを引く。沈佺期の詩の場合、朝廷の様子を詠じている。その他、儲光羲「貽王侍御出臺掾丹陽」（『全唐詩』巻一三八）に、「旌戟儼成行、鶏人伝発煦」（旌戟　行を成すを儼（おごそ）かにし、鶏人　煦（ひかり）を発するを伝う）も朝廷の様子を言う。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

以上の四句が一韻で、最初の二句で固有名詞や周辺の様子を挙げて戦闘の場所を巨視的に詠じ、後の二句で異民族との戦闘に備える兵士を登場させる。

9・10　沙磧連天霜草平、野駝尋水磧中鳴

〔沙磧〕砂漠。

唐代以前の詩にほとんど用例がない。梁の王臺卿「泛江詩」（『藝文類聚』巻八。『初学記』等では庾信の詩として採録）に、「錦纜迴沙磧、蘭橈避荻洲」（錦纜　沙磧を迴り、蘭橈　荻洲を避く）とあるのは、江岸の砂浜を指す。六朝詩には砂漠を指す用例は見当たらないが、唐詩にはそうした例が多く見られるようになる。李白「行行遊且猟篇」（前掲）に、「海辺観者皆辟易、猛気英風振沙磧」（海辺観る者　皆辟易し、猛気英風　沙磧に振るう）と、辺境の少年の血気盛んなさまを言うなかに見える。岑参「歳暮磧外寄元撝」（『校注』巻二）に、「沙磧人愁月、山城犬吠雲」（沙磧　人は月を愁い、山城　犬は雲に吠ゆ）とあるのは、砂漠の上に照る月を詠じている。杜甫には二例、陳注は「送人従軍」（『詳注』巻八）に、「今君度砂磧、累月断人烟」（今君　砂磧を度り、月を累ねて人烟断つ）とあるのを引く。この詩の場合、西方吐蕃との戦争に出かける人を見送っている。もう一例「八哀詩・贈司空王公思礼」（『詳注』巻一六）で、「服事哥舒翰、意無流沙磧」（哥舒翰に服事して、意　流沙磧を無みす）とあり、王司空の血気盛んなさまを詠う。張籍の用例はこの一例のみ。

8句は諸本の異同が多い。「沙磧」について、全唐詩・楽府詩集・百家本は「渓水」に作り、全唐詩は「一作沙磧」とする。また、唐文粋・四庫全書・静嘉堂本は「漢水」に作る。徐注は、「渓水」に作るのは誤りであるとする。「漢水」は詩の舞台が辺塞の地であるため地理的に相応しくない。「渓水」も、砂漠地帯を詠じた内容から考えて妥当ではなかろう。

〔連天〕空に続く。砂漠が遥か地平線の彼方まで続く様子を言う。潘岳「藉

田賦」（『文選』巻七）に、「震震填填、塵騖連天、以幸乎藉田」（震震填填として、塵は騖りて天に連なり、以て藉田に幸す）とあるのは、ほこりが天に舞い上がる様子を言う。六朝の詩では、梁の元帝「燕歌行」（前掲）に、「並海連天合不開、那堪春日上春臺」（海を並べ天を連ねて　合して開かず、那ぞ春日に春臺に上るに堪えんや）とあるのは、離れている夫との距離を言うなかに見える。六朝詩にはほとんど用例がないが、唐詩では初唐から多くの用例がある。張説「和尹従事懋泛洞庭」（『全唐詩』巻八九）に、「平湖一望上連天、林景千尋下洞泉」（平湖一望すれば　上りて天に連なり、林景千尋洞泉に下る）とあるのは、洞庭湖が広がるさまを言い、王維「華嶽」（趙注本巻二）に、「連天疑黛色、百里遥青冥」（天に連なりて　黛色かと疑い、百里　青冥に遥かなり）とあるのは、華嶽が高く聳えるさまを言う。

用例の多くが、川や湖、草原が広がるさまを表現する用例であるが、張籍の用法と類似した例としては、岑参「寄宇文判官」（『校注』巻二）に、「終日風与雪、連天沙復山」（終日　風と雪とあり、連天　沙復た山あり）とある。杜甫には用例がない。張籍にもこの一例のみ。

〔霜草〕霜を受けて傷められた草。

唐代以前の詩に熟語として用例がない。唐詩では、初唐の蘇頲「御箭連中双兔」（『全唐詩』巻七四）に、「影射含霜草、魂消向月弦」（影は射られて霜草を含み、魂は消えて　月弦に向かう）とある。陳注は李白「覧鏡書懐」（王琦注本巻二四）に、「自笑鏡中人、白髪如霜草」（自ら笑う　鏡中の人、白髪　霜草の如きを）とあるのを引いている。杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

〔野駝〕野生の駱駝。

唐代以前の詩に用例が見当たらない。唐詩にも、張籍以外では岑参の詩に一例用例が見られるだけである。「酒泉太守席上酔後作」（『校注』巻二）に、「渾炙犁牛烹野駝、交河美酒金叵羅」（渾んに犁牛を炙り　野駝を烹、交河の美酒　金の叵羅）とあり、西方の酒泉の地（今の甘粛省酒泉）での宴席を詠じた詩に野駝が詠われている。

〔尋水〕水を探し求める。

普通に使われる言葉のようだが、唐代以前の詩に用例が見当たらない。唐詩中にも用例は少なく、用いられるのは中唐になってからである。劉長卿「送友人南遊」（『全唐詩』巻一四八）に、「不愁尋水遠、自愛逐連山」（水を尋ぬることの遠きを愁えず、自ら連山を逐うを愛す）とある。張籍と同時代の白居易「寄題廬山旧草堂、兼呈二林寺道侶」（三四七二）に、「登山尋水応無力、不似江州司馬時」（山に登り水を尋ぬるに　応に力無かるべし、江州司馬の時に似ず）とある。

杜甫には用例がない。張籍にこの他もう一例、45「別鶴」（巻二）に、「尋水終不飲、逢林亦未棲」（水を尋ぬるも　終に飲まず、林に逢うも　亦未だ棲まず）とある。

11・12　隴頭風急雁不下、沙場苦戦多流星

〔隴頭〕砂漠の丘陵地帯。隴頭山は今の甘粛省にある山で、辺塞を詠じた詩に登場する地名であるが、ここでは固有名詞としてではなく、そうしたイメージを備えた普通名詞として用いられていると解釈した。

六朝・唐代を通じて詩の中に多くの用例がある。楽府「関山月」と同じ横吹曲の楽府題に「隴頭」「隴頭吟」「隴頭水」があり、張籍にも414「隴頭行」（巻七。『楽府詩集』は「隴頭」に作る）があり、異民族に侵略された涼州の人々の悲劇が詠われる。陳注は劉孝威「横吹曲隴頭流水詩」（『藝文類聚』巻四二）に、「従軍戍隴頭、隴水帯沙流」（軍に従いて　隴頭を戍り、隴水沙流を帯ぶ）とあるのを引いている。

杜甫には用例がない。張籍には先の「隴頭行」も含めて五首の詩に用いられており、いずれも戦争や辺塞の地を詠じている。一例として417「塞上曲」（巻七）に、「胡風吹沙度隴飛、隴頭林木無北枝」（胡風沙を吹きて　隴を度りて飛び、隴頭の林木　北枝無し）とある。晩唐の翁綬の同題楽府に、「徘徊漢月満辺州、照尽天涯到隴頭」（徘徊の漢月　辺州に満ち、天涯を照らし尽くして隴頭に到る）とある。

〔風急〕風が激しい。六朝・唐代を通じて詩の中に多くの用例がある。

次の雁とのつながりでは、梁の簡文帝「賦得隴坻雁初飛詩」（『藝文類聚』巻九一）に、「隴狭朝声聚、風急暮行稀」（隴狭くして　朝声聚まり、風急にして　暮行稀なり）とあり、呉均「使廬陵詩」（『藝文類聚』巻二七）に、「風急雁毛断、冰堅馬迹落」（風急にして　雁毛断たれ、冰堅くして　馬迹落つ）とある。なお、梁の戴暠の「度関山」（『楽府詩集』巻二七）には、「山頭看月近、草上知風急」（山頭　月の近きを看、草上　風の急なるを知る）とある。

陳注は、杜甫「登高」（『詳注』巻二〇）に、「風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛迴」（風急に天高くして　猿嘯哀し、渚清く沙白くして　鳥飛び迴る）という有名な句を引いている。杜甫にはこの他三例用例がある。張籍にはこの一例のみ。

〔雁不下〕風の強さを強調するとともに、故郷からの、また故郷への便り（雁書）をやりとりする手段がないことを暗示しているのであろう。

同題楽府のなかでは、盧照隣に「寄書謝中婦、時看鴻雁天」（書を寄せて中婦に謝せんとし、時に鴻雁の天を看る）とあり、妻に手紙を贈る媒介としての雁が詠われる。その他、戴叔倫の作（二首其二）に「一雁過連営、繁霜覆古城」（一雁　連営を過ぎ、繁霜　古城を覆う）とあり、また、晩唐の翁綬の作にも「笳吹遠戍孤烽滅、雁下平沙万里秋」（笳　遠戍に吹きて　孤烽滅し、雁　平沙に下りて　万里秋なり）と見え雁が登場する。

〔沙場〕砂漠。辺塞詩や辺塞を詠じた詩で戦場として詠われる。「沙場」がそうしたイメージを持つことに関しては、松浦友久氏に「「沙場」考」（『詩語の諸相』所収、研文出版、一九九五年増訂版）がある。

文学作品では、張衡「南都賦」（『文選』巻四）に、「於是羣士放逐、馳乎沙場」（是に於いて羣士は放逐して、沙場に馳す）と、狩猟の遊びを記すなかに見えるが、詩では唐代以前にほとんど用例がない。後漢の蔡琰の作に擬せられる「胡笳十八拍」其一七（『古詩紀』巻一四）に、「塞上黄蒿兮枝枯葉乾、沙場白骨兮刀痕箭瘢」（塞上の黄蒿　枝は枯れ葉は乾き、沙場の白骨　刀痕箭瘢あり）とあるのは、辺塞での戦争と関連し、梁の簡文帝「詠寒鳧詩」（『藝文類聚』巻九一）に、「迴水浮軽浪、沙場弄羽衣」（迴水にて　軽浪に浮かび、沙場にて　羽衣を弄す）とあるのは、詩題に言う「寒鳧」の様子を詠じたなかに見える。

唐詩では、初唐から用例が見られるようになる。有名な高適「燕歌行」（『全唐詩』巻二一三）に、「君不見沙場征戦苦、至今猶憶李将軍」（君見ずや　沙場　征戦の苦、今に至りて猶お李将軍を憶う）とある他、辺塞詩や辺塞を詠じた詩の中に用いられている。陳注は王翰「涼州詞二首」其一（『全唐詩』巻一五六）に、「醉臥沙場君莫笑、古来征戦幾人回」（酔いて沙場に臥す　君笑うこと莫かれ、古来征戦　幾人か回らん）とある有名な句を引いている。

杜甫には一例、「復愁十二首」其七（『詳注』巻二〇）に、「花門小箭好、此物棄沙場」（花門　小箭好く、此の物　沙場に棄てらる）とあるのは、戦場の意味で用いられている。張籍にはこの一例のみ。

〔苦戦〕苦しい戦い。『史記』高祖本紀に、「天下匈匈苦戦数歳、成敗未可知」（天下匈匈として苦戦すること数歳、成敗　未だ知るべからず）とある他、史書にはいくつか用例が見られるが、唐代以前の詩には用例が見当たらない。

唐詩では、初唐の駱賓王「夕次蒲類津」（『全唐詩』巻七九）に、「竜庭但苦戦、燕頷会封侯」（竜庭　但だ苦戦し、燕頷　封侯と会す）とすでに見え、李白「古風五十九首」其六（王琦注本巻二）にも、「苦戦功不賞、忠誠難可宣」（苦戦するも　功は賞せられず、忠誠　宣ぶべきこと難し）、岑参「胡歌」（『校注』巻二）に、「関西老将能苦戦、七十行兵仍未休」（関西の老将　能く苦戦し、七十にして兵を行いて　仍お未だ休まず）と見える。杜甫には二例、「苦戦行」（『詳注』巻一一）と題する詩があり、「苦戦身死馬将軍、自云伏波之子孫」（苦戦して身は死す　馬将軍、自ら云う　伏波の子孫なりと）とある。また、有名な「兵車行」（前掲）にも、「況復秦兵耐苦戦、被駆不異犬与鶏」（況んや復た秦兵は苦戦に耐うるとて、駆らるること犬と鶏とに異ならず）とある。張籍の用例はこの一例のみ。

〔多流星〕流れ星が多い。

この流星が何を意味するかについて、諸注では解釈が異なる。『中晩唐詩叩弾集』所掲の注では、「暗に流星の蜀の営に投ぜし事を用う」（暗用流星投蜀営事）といい、三国時代、蜀の諸葛亮が死去した時、赤く尖った流れ星が諸葛亮の陣営に落ち、その後にわかに諸葛亮が死去した故事を用いているとする。『三国志』蜀書諸葛亮伝裴松之注所引の『晋陽秋』に見える（星赤而芒角、自東北西南流、投于亮営、三投再還、往大還小。俄而亮卒。）。近年出版された『増訂注釈全唐詩』（文化藝術出版社、第二冊、一八五四頁）のこの詩の注でもこれを踏襲し、大将の死を暗に喩えていると説明する。

徐注は、流星は深夜に見えることが多く、戦いが多く深夜に及ぶことからこのように詠ったと説明する。つまり「流星多し」は戦いの時間の長さ、戦闘の激しさを表現すると解釈する。

李樹政注では、砂漠地帯は空が広がっているため簡単に流星を見つけることができるとし、戦場の風景を表現したものと解釈している。

李建崑注では、流星はほうき星（彗星）のことで、昔からこの星が現れると戦災が起こると言われている。この句は戦場の風景を実写している、と説明する。『叩弾集』『増訂注釈全唐詩』のように諸葛亮死去の故事を指摘してはいないが、不吉な流星のイメージを踏まえるという点では一致している。

以上、諸注の解釈は、砂漠の風景を詠んだか、風景とは別に意図するものがあったかの大きく二つに分けることができよう。

唐詩のおける「流星」の用例を見てみると、多くがスピードの速さを比喩的に表現する時に用いられている。「流星」の用例は杜甫にも一つあり、「揚旗」（『詳注』巻一三）に、「迴迴偃飛蓋、熠熠迸流星」（迴迴　飛蓋偃（ふ）し、熠熠　流星迸（ほとばし）る）とあるのも、車のかさのように素早く回転する旗の様子を「流れ星のようだ」と表現する。

しかし、そうしたスピードの速さの比喩とは別に、中唐の頃から夜空の風景を詠じたなかにも用いられるようになる。楊凝「行思」（『全唐詩』巻二九〇。なお、晩唐の李昌符の作としても伝わる）に、「破月銜高岳、流星払暁空」（破月　高岳を銜み、流星　暁空を払う）とあるのは、秋の明け方の空の様子を詠じている。また、元稹「表夏十首」其三（『元稹集』巻七）に、「露葉傾暗光、流星委餘素」（露葉　暗光を傾け、流星　餘素を委つ）とあるのは、夏の夜、流星が白い尾を引く様子を詠じている。さらに、賈島「宿山寺」（『全唐詩』巻五七三）には、「流星透疏木、走月逆行雲」（流星　疏木を透り、走月　行雲に逆く）とあるのは、寺のある山から眺めた冬の空の様子を詠ずるなかに見える。

ここでは、11句の「雁下らず」が風の激しさを表現するとともに故郷との音信不通の状態を暗に表すことから、12句も砂漠の夜空を詠じながら、その裏には『叩弾集』や李建崑注が指摘するように、戦況の悪化を暗に指していると解釈した。

なお、陳注は王昌齢「少年行二首」其一（『全唐詩』巻一四〇）に、「青槐夾両道、白馬如流星」（青槐　両道を夾み、白馬　流星の如し）とあるのを引く。白馬の速さを流星に準えた表現である。杜甫の「流星」の用例は、先に挙げた一例のみ。張籍もこの一例があるだけである。

以上の四句が一韻で、前四句に引き続いて兵士の歌の内容が記される。ここでは前の四句で地名や戦闘場所を巨視的に詠じたのを受けて、実際の戦闘の舞台となる砂漠に絞ってその風景が詠われている。前二句が戦闘前の様子を詠じていることから後二句もこれから激戦が始まる前の砂漠の様子を詠じていると考えられる。

13・14　可憐万里関山道、年年戦骨多秋草

〔万里〕古くから詩文に用例のある言葉。同題楽府の多くに用いられている。その場合、故郷との距離の遠さを表現する場合（賀力牧、盧照隣、李白、耿湋等）と、関所のある場所の広さを表現する場合（李端、翁綬等）の二通りあるようだ。張籍の場合、次句が辺塞の戦場について詠っていることから、ここは後者の意味で用いられていると解釈した。李端の同題楽府に、「祇応城影外、万里共如霜」（祇だ応に城影の外、万里　共に霜の如くなるべし）とあり、翁綬の作に「笳吹遠戍孤烽滅、雁下平沙万里秋」（笳　遠戍に吹いて　孤烽滅し、雁　平沙に下りて　万里秋なり）とある。

なお、楽府詩集・四庫全書・全唐詩は「万国」に作り、全唐詩は「一に万里に作る」と言う。唐文粹は、「高国」に作るが、これは「萬」を誤写したものだろう。先に楽府「関山月」の「万里」の用例を挙げたように、「関山」と「万里」は関連の深い語であり、「万里」が妥当であろう。『楽府解題』に引かれる梁代の民歌「木蘭詩」（前掲）にも、「万里赴戎機、関山度若飛」（万里　戎機に赴き、関山　度ること飛ぶが若し）とあるなど、両者が一緒に用いられる例は多くある。

また「里」について、静嘉堂本は「古」に作る。「万古」（大昔、大昔から）は六朝・唐代を通じて詩の中に多くの用例が見られる言葉だが、ここでは14句に「年年」（毎年）があることから、「万里」が妥当であると考えた。

〔関山道〕関所のある山道。

唐代以前の古い用例は見当たらない。唐詩にはいくつか用例が見え、顧況「棄婦詞」（『全唐詩』巻二六四に、「流泉咽不燥、万里関山道」（流泉　咽いで燥かず、万里　関山の道）とあり、五字の並びがここと同じ。なお、同じ詩が李白の集に「棄婦詞」（王琦注本巻六）として採録され、そこでは「流泉咽不掃、独夢関山道」（流泉　咽いで掃わず、独り関山の道を夢む）となっている。また、顧況「劉禅奴弾琵琶歌」（『全唐詩』巻二六五）に、「楽府只伝横吹好、琵琶写出関山道」（楽府は只だ横吹の好きを伝え、琵琶は関山の道を写し出す）とある。

〔年年戦骨多秋草〕陳注に、「（張）籍詩意謂、戦骨多于秋草也」と言う。長引く戦争で死んだ兵士の骨が砂漠に転がり、それが秋の草よりも多い。戦争の悲惨さを表現した一句である。

「戦骨」は、戦死した兵士の骨。古い用例の見当たらない言葉で、唐詩では盛唐の頃から用例が見え始める。陳注が引く盛唐の李頎「古従軍行」（『全唐詩』巻一三三）に、「年年戦骨埋荒外、空見蒲桃入漢家」（年年戦骨　荒外に埋もれ、空しく蒲桃の漢家に入るを見る）とあるのは、四字の並びが張籍と同じ。高適「酬裴員外以詩代書」（『全唐詩』巻二一一）に、「行人無血色、戦骨多青苔」（行人　血色無く、戦骨　青苔より多し）とあるのは、安史の乱後の様子を言う。

杜甫には二例、「前出塞九首」其三（『詳注』巻二）に、「功名図麒麟、戦骨当速朽」（功名　麒麟に図かれ、戦骨　当に速やかに朽つべし）とあるのは、功名が残れば骨は朽ち果ててもかまわないとする丈夫の志が詠われる。また、「東楼」（『詳注』巻七）には、「但添新戦骨、不返旧征魂」（但だ新しき戦骨を添うのみにして、旧き征魂を返さず）とある。さらにここでは杜甫「兵車行」（前掲）の句を挙げておくべきであろう。「君不見青海頭、古来白骨無人収、新鬼煩冤旧鬼哭、天陰雨湿声啾啾」（君見ずや　青海の頭、古来

白骨　人の収むる無く、新鬼は煩冤し　旧鬼は哭し、天陰り雨湿るとき　声啾啾たるを）とあり、捨てられたまま収拾されずにいる戦死者の骨が詠われている。

「戦骨」の用例は、張籍にはこの一例のみ。なお、王建の「関山月」に、「凍輪当磧光悠悠、照見三堆両堆骨」（凍輪　磧に当たって光悠悠たり、照らし見る　三堆両堆の骨を）と、小山のように積まれた戦死者の骨が詠われている。

なお、ここと類似した張籍の詩句に、417「塞上曲」（巻七）に、「年年征戦不得閑、辺人殺尽唯空山」（年年征戦して　閑なるを得ず、辺人殺し尽くして　唯だ空山のみ）とある。

以上の二句がひとまとまりで、これまでの戦闘で戦死した兵士の数の多さを言い、戦争の悲惨さを詠って詩を締めくくっている。

【補】

一　張籍「関山月」の構成

この詩は換韻の箇所を参考にして、以下の四段に分けることができる。

1～4　秋の関山の様子と兵士（主人公）の登場
5～8　戦況と戦いを前にした兵士等の様子
9～12　砂漠（戦闘場所）の風景
13・14　作者の主張（兵士に対する憐憫と戦争批判）

1～4句は1・2句と3・4句で換韻しているが、内容的にはそれほど変化はない。なお、同題楽府で換韻しているのは、長孫左輔と張籍の二人だけである。

二　張籍「関山月」の特徴

郭茂倩『楽府詩集』に掲載されている「関山月」を見ると、【題解】にも記したように、辺地に出征した兵士が、関所の山にかかる月を見て望郷の念を抱くという内容であり、離別の悲しみが主題となっているものがほとんどである。同題楽府の多くが離ればなれになっている故郷の妻を登場させていたり、兵士が妻を想起したりしているのも、この楽府の主題が離別の悲しみを言うことにあることと関係していよう。

夜長無与晤　夜長くして　与に晤る無し
衣単誰為裁　衣単にして　誰か為に裁たん　（元帝）

郷園誰共此　郷園　誰か此を共にせん
愁人屡益愁　愁人　屡しば愁いを益す　（陸瓊）

関山三五月　関山　三五の月
客子憶秦川　客子　秦川を憶う
思婦高楼上　思婦　高楼の上
当窗応未眠　窗に当たりて　応に未だ眠れざるべし　（徐陵）

寄書謝中婦　書を寄せて中婦に謝せんとし
時看鴻雁天　時に鴻雁の天を看る　（盧照隣）

高楼当此夜　高楼　此の夜に当たり
嘆息未応閑　嘆息　未だ応に閑ならざるべし　（李白）

今夜青楼上　今夜　青楼の上
還応照所思　還た応に思う所を照らすべし　（耿湋）

そうしたなか、張籍の詩で望郷離別の悲しみと関係するのは、3・4句「関山秋来雨雪多、行人見月唱辺歌」（関山　秋来たりて　雨雪多く、行人　月を見て　辺歌を唱う）である。「辺歌」は、【語釈】で述べたように、従軍の苦労や望郷の念を歌った辺塞詩を指すと考えられる。しかし、ここでは「辺歌を唱う」と客観的に兵士の姿が描写されるだけで、先に挙げた他の同題楽府のように、兵士の心情については記されていない。このことは、張籍の作詩の目的が、兵士の望郷離別を詠うことではなく、別のところにあったことを示していよう。

その目的とは、この詩の最後の二句にストレートに表現されている戦争の悲惨さを言うことである。何年も繰り返されている戦争のために、毎年莫大な数の戦死者が生まれており、冒頭に登場する一人の兵士も、もう間もなく戦闘で死ぬことが暗示されている。14句の「秋草」は、9句に詠われる一面に広がる「霜草」と同じものであり、あらかじめ一面に広がる草原を出しておいて、それよりも戦死者の骨の数が多いと詠うことで、戦死者の数の多さ

を強調しようとする張籍の意図をうかがうことができる。そうした戦争の悲惨さを主題とし、張籍のようにストレートに表現し得た同題楽府は、張籍以前にはない。

そうしたなかで張籍の作に比較的近いものとして王建の作が挙げられる。

關山月　　関山の月
營開道白前軍發　　営開き道白くして　前軍発す
凍輪當磧光悠悠　　凍輪　磧に当たりて　光悠悠たり
照見三堆兩堆骨　　照らし見る　三堆兩堆の骨
邊風割面天欲明　　辺風　面を割りて　天　明けんと欲し
金莎嶺西看看沒　　金莎嶺西　看看没す

夜明け後に始まる戦闘に向け、最前線を任された兵士たちは月明かりの照るなか陣営を出発する。月明かりが戦死者の骨の山々を照らし出すが、それも一瞥するだけでもくもくと前に進む。寒風が冷たく顔に吹き付けるなか、月が山に沈みもう間もなく戦いが始まるという緊迫した場面が描写され、この詩は結ばれる。

張籍が詩の結びで「憐れむべし……」と自らコメントしているのとは対照的に、王建は戦場と兵士の様子を描写するだけで、自らの感想を述べることはない。また、張籍の詩では「辺歌を唱う」の箇所に間接的にではあるが表現されていた兵士の望郷離別の心情も、王建の詩には一切詠われていない。両者の詩は兵士が置かれる苛酷な状況を描くことで戦争の悲惨さを表現しようとしている点では共通するが、表現手法は異なっていると言えよう。

以上に記した特徴に加えて、張籍の特徴として、兵士の描写の細かさが挙げられよう。関所の山や周辺の風景の描写は張籍以前のどの同題楽府にも見られるが、張籍の7・8句のように、これからの戦闘に備えて行動する兵士の描写は他の作には見られないものである。こうした細かい描写は、張籍のその他の楽府にも共通する特徴であり、これまでにも何度か指摘した。

（畑村）

28 少年行

【題解】

遊侠少年のうた。「少年」は若者・青年を指す。ここでは特にいわゆる遊侠少年のこと。中国古典詩に頻見する題材である。

諸注も引く『楽府詩集』雑曲歌辞六「結客少年場行」（巻六六）の解題には次のようにいう。

『後漢書』曰、「祭遵嘗為部吏所侵、結客殺人。」曹植「結客篇」曰、「結客少年場、報怨洛北邙。」『楽府解題』曰、「結客少年場行、言軽生重義、慷慨以立功名也。」『広題』曰、「漢長安少年殺吏、受財報仇。相与探丸為弾、探得赤丸斫武吏、探得黒丸殺文吏。尹賞為長安令、尽捕之。長安中為之歌曰、『何処求子死、桓東少年場。生時諒不謹、枯骨復何葬。』」按結客少年場、言少年時結任侠之客、為游楽之場、終而無成。故作此曲也。」

『後漢書』に曰く、「祭遵　嘗て部吏の侵す所と為り、客と結んで人を殺す」と。曹植の「結客篇」に曰く、「客と結ぶ　少年の場、怨に報ず　洛の北邙」と。『楽府解題』に曰く、「結客少年場行は、生を軽んじ義を重んじ、慷慨して以て功名を立つるを言うなり」と。『広題』に曰く、「漢の長安の少年　吏を殺し、財を受けて仇に報ず。相い与に丸を探りて弾と為し、赤丸を探り得れば武吏を斫り、黒丸を探り得れば文吏を殺す。尹賞　長安の令と為り、尽く之を捕らう。長安中　之が為に歌いて曰く、『何れの処にか　子の死せるを求めん、桓東　少年の場。生ける時　諒に謹しまず、枯骨　復た何ぞ葬られん』と。按ずるに結客少年場は、少年の時　任侠の客と結び、游楽の場を為し、終に成る無きを言う。故に此の曲を作るなり」と。

そして、以下の各楽府題のもとに各詩人の作を収めている。

「結客少年場行」
宋・鮑照一首／梁・劉孝威一首／北周・庾信一首／隋・孔紹安一首／唐・虞世南一首／虞羽客一首／盧照隣一首／李白一首／沈彬一首
「少年子」
斉・王融一首／梁・呉均一首／唐・李百薬一首／李白一首
「少年楽」
李賀一首／張祜一首
「少年行」
李白三首／王維四首／王昌齢二首／張籍一首（この詩）／李嶷三首／劉長卿一首／令狐楚四首／杜牧二首／杜甫三首／張祜一首／韓翃一首／施肩吾一首／貫休一首／韋荘一首
「漢宮少年行」
李益一首
「長楽少年行」

崔国輔一首
「長安少年行」
梁・何遜一首／陳・沈炯一首／唐・李廓十首／皎然一首
「渭城少年行」
崔顥一首／
「邯鄲少年行」
高適一首／鄭錫一首

遊侠少年を詠じるのはこれら楽府題に「少年」を含むものばかりではなく、「白馬篇」や「軽薄篇」等の楽府題もあり、後の【語釈】の中でもこれらの作品にも目配りをすることとした。また、こういった遊侠少年を描く作品の中で、張籍のこの詩がどのような位置を占めているかについては、【補】の部分で触れることにしたい。

なお、張籍が詩の中で遊侠少年を描いたものとしては、8「白紵歌」（巻一）に「皎皎白紵白且鮮、将作春衣称少年」（皎皎たる白紵　白く且つ鮮やかなり、将て春衣の　少年に称うを作る）の句が見えた。その【語釈】をも参照。

【本文・書き下し文】

1 少年従猟出長楊　少年　猟に従いて　長楊に出づ
2 禁中新拜羽林郎　禁中　新たに拝す　羽林郎
3 獨到輦前射雙虎　独り輦前に到りて　双虎を射
4 君王手賜・金璫　君王　手ずから賜う　黄金の璫
5 日日鬬雞都市裏　日日　鬬鶏す　都市の裏
6 贏得寶刀重刻字　宝刀を贏ち得て　重ねて字を刻す
7 百里報讐夜出城　百里　讐に報いんとして　夜　城を出で
8 平明還在娼樓醉　平明　還りて　娼楼に在りて酔う
9 遙聞虜到平陵下　遥かに聞く　虜の平陵の下に到るを
10 不待詔書行上馬　詔書を待たず　行きて馬に上る
11 斬得名王獻桂宮　名王を斬り得て　桂宮に献じ
12 封侯起第一日中　侯に封ぜられ　第を起こす　一日の中
13 不同六郡良家子　同じからず　六郡　良家の子の
14 百戰始取邊城功　百戦して　始めて辺城の功を取るに

【口語訳】

1 若者は　天子の狩猟に従って　長楊宮へとお出ましだ
2 この頃　禁中で羽林郎に拝せられたばかり
3 ただ一人　帝の御車の前に進み出て　二頭の虎を射抜き
4 帝みずから　黄金の璫を褒美に与える
5 毎日毎日　盛り場で闘鶏に加わり
6 その賭で宝刀を勝ち取って　上から字を刻む
7 百里かなたの仇に報復するため　夜に町を出ると
8 夜明けには帰ってきて　妓楼で酔っぱらっている
9 遠く平陵の辺りに　異民族が侵入してきたと聞きつけると
10 みことのりも待たずに　早速馬に跨っている
11 名王の首を斬り取って　桂宮に献上し
12 その日のうちに　侯に封ぜられ　お屋敷を建てる
13 なんと異なっていることだろう　六郡の良家の子弟たちは
14 何度も従軍して　やっと辺境地帯での戦功を挙げるというのに

【押韻】

楊―下平一〇陽　郎・璫―下平一一唐（同用）
裏―上声六止　字―去声七志　醉―去声六至（同摂内の上去通押）
下・馬―上声三五馬
宮・中・功―上平一東

【語釈】

1・2　少年従猟出長楊、禁中新拝羽林郎
〔少年〕ここでは遊侠少年を指す。【題解】参照。
ここでは陳注の引く何遜の「長安少年行」（『楽府詩集』巻六六）に「長安美少年、羽騎暮連翩」（長安の美少年、羽騎　暮に連翩たり）という例のみを挙げておこう。

〔従猟出長楊〕天子の狩猟に随行して、長楊宮へと出てきた。「出長楊」は「長楊を出づ」とも読めるであろうが、長楊が狩猟の場であることから、「長楊に出づ」と訓読しておいた。

「猟」は下の「長楊」の語や後の部分の表現から、天子の遊猟のことと思われる。

「長楊」は宮殿の名。長安の西郊盩厔県（現在の陝西省周至県）にあった。諸注に引く『三輔黄図』秦宮に「長楊宮在盩厔県東南三十里。本秦旧宮、至漢修飾之、以備行幸。宮中有垂楊数畝、因為宮名。門曰射熊館、秦漢遊猟之所」（長楊宮は盩厔県の東南三十里に在り。本　秦の旧宮、漢に至りて之

を修飾し、以て行幸に備う。宮中に垂楊数畝有り、因りて宮名と為す。門を射熊館と曰い、秦漢の遊猟の所なり）という。

また、徐注は『漢書』揚雄伝下の次の逸話を引いている。

明年、上将大誇胡人以多禽獸、秋、命右扶風発民入南山。西自褒・斜、東至弘農、南敺漢中、張羅罔・罝罘、捕熊羆・豪豬・虎豹・狖玃・狐菟・麋鹿、載以檻車、輸長楊射熊館。以罔為周阪、縦禽獸其中、令胡人手搏之、自取其獲、上親臨観焉。

明年、上　将に大いに胡人に誇るに禽獸の多きを以てせんとし、秋、右扶風に命じて民を発して南山に入らしむ。西は褒・斜より、東は弘農に至り、南は漢中を敺け、羅罔・罝罘を張り、熊羆・豪豬・虎豹・狖玃・狐菟・麋鹿を捕らえ、載するに檻車を以てし、長楊の射熊館に輸す。罔を以て周阪と為し、禽獸を其の中に縦ち、胡人をして手ずから之を搏ち、自ら其の獲を取らしめ、上　親しく臨観す。

この時、農民たちは作物の収穫ができなかったといい、射熊館に随行した揚雄が諷諭の作として作ったのが「長楊賦」（『漢書』揚雄伝）である。

唐までの詩にもしばしば用例が見えるが、狩猟の場所として描かれたものとしては、庾信の「冬狩行四韻連句応詔」（『庾子山集注』巻四）に「観兵細柳城、校猟長楊苑」（兵を観る　細柳の城、校猟す　長楊の苑）といい、隋の煬帝の「白馬篇」（『文苑英華』二〇九。『楽府詩集』は孔稚珪の「白馬篇二首」其二とするが、煬帝の作とすべきようである）に「射熊入飛観、校猟下長楊」（熊を射て　飛観に入り、校猟して　長楊に下る）というなどの用例がある。後者は曹植の「白馬篇」の流れを汲む、遊侠少年を詠ずる作である。

唐詩においても、劉知幾の「儀坤廟楽章」（『全唐詩』巻九四）に「校猟長楊苑、屯軍細柳営」（校猟す　長楊の苑、屯軍す　細柳の営）といい、李白の「温泉侍従帰逢故人」（王琦注本巻九）に「漢帝長楊苑、誇胡羽猟帰」（漢帝　長楊の苑、胡に誇り　羽猟して帰る）というなどの例があるほか、李嶷の「少年行三首」其二（『全唐詩』巻一四五）には「侍猟長楊下、承恩更射飛」（猟に侍す　長楊の下、恩を承けて　更に飛ぶを射る）と、遊侠少年が天子の恩を承けて長楊宮での狩猟に陪席することが詠じられている。

杜甫には用例がなく、張籍にもこの例のみ。

なお、この部分を『文苑英華』では「従猟去長楊」（猟に従いて長楊に去る）に作り、『楽府詩集』・『唐文粋』では「従出猟長楊」（従い出でて長楊に猟す）に作っている。意味としてはほとんど違いがない。

〔禁中〕天子の居所。御所。

李冬生注は、『史記』秦始皇本紀に「於是二世常居禁中、与（趙）高決諸事」（是に於いて　二世　常に禁中に居り、高と諸事を決す）という記述と、「蔡邕曰、禁中者、門戸有禁、非侍御者不得入、故曰禁中」（蔡邕曰く、禁中とは、門戸に禁有りて、侍御の者に非ずんば入るを得ず、故に禁中と曰う）という裴駰の集解を引いている。

ここでは、正規のルートで羽林郎の官位を授けられたのではなく、皇帝の私室で特別に授けられたことを表現するために「禁中」の語が用いられているのであろう。

詩においても、梁の張率の「相逢行」（『玉臺新詠』六）に、「朝従禁中出、車騎並駆馳」（朝に禁中より出で、車騎　並びて駆馳す）といい、蘇頲の「立春日侍宴内出剪綵花応制」（『全唐詩』巻七三）に「暁入宜春苑、穠芳吐禁中」（暁に宜春苑に入れば、穠芳　禁中に吐く）といい、陳注も引く王昌齢の「蕭駙馬宅花燭」（『全唐詩』巻一四三）に「青鸞飛入合歓宮、紫鳳銜花出禁中」（青鸞　飛びて入る　合歓の宮、紫鳳　花を銜んで　禁中を出づ）というなど、多くの用例がある。

杜甫に一例、「寄狄明府博済」（『詳註』巻一九）に「禁中決冊請房陵、前朝長老皆流涕」（禁中　冊を決して房陵を請い、前朝の長老　皆な涕を流す）という。張籍には他に二例、一例を挙げれば、220「朝日敕賜百官桜桃」（巻四）に「日色遥分門下坐、露香才出禁中園」（日色　遥かに分かつ　門下の坐、露香　才かに出づ　禁中の園）の句がある。

〔新拝羽林郎〕最近羽林郎に拝せられたばかり。「拝」は官を授けること。

「羽林郎」は官名、宿衛・侍従のことをつかさどる武官。天子の親衛隊。羽のように速く、林のように多いことから名付けられたともいい、天子の羽翼となるからともいう。

『漢書』百官公卿表上の郎中令の条に「又期門・羽林皆属焉」（又た期門・羽林皆な焉に属す）といい、その注に、「師古曰、羽林亦宿衛之官。言其如羽之疾、如林之多也。一説、羽所以為王者羽翼也」（師古曰く、羽林も亦た宿衛の官なり。其の羽の疾きが如く、林の多きが如くなるを言うなり。一説に、羽は王者の羽翼為る所以なり、と）と記されている。

また、陳注等が引く『後漢書』百官志二に「羽林郎、比三百石。本注曰、無員。掌宿衛・侍従。常選漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河凡六郡良家補」（羽林郎は、比三百石。本注に曰く、員無し。宿衛・侍従を掌る。常に漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河凡そ六郡の良家を選びて補う）という

記述がある。なお、羽林郎が六郡の良家の子弟から補充されたことについては、13・14句の【語釈】参照。

後漢の辛延年に「羽林郎」（『楽府詩集』巻六三）があって楽府題にもなっているが、遊侠少年と縁の深い詩語である。古くから用例があるが、陳注も引く庾信の「結客少年場行」（『楽府詩集』巻六六）には、「今年喜夫壻、新拝羽林郎」（今年　喜ぶ　夫壻の、新たに羽林郎に拝せらるるを）の句があり、五字の並びが張籍と全く同じになっている。また、先に引いた隋の煬帝の「白馬篇」（前出）にも「問是誰家子、宿衛羽林郎」（問う　是れ　誰が家の子ぞと、宿衛　羽林郎）の句がある。

唐に入っても、王維の「少年行四首」其二（趙本巻一四）に「出身仕漢羽林郎、初随驃騎戦漁陽」（出身　漢に仕えて　羽林郎あり、初めて驃騎に随い　漁陽に戦う）といい、先に其二を引いた李嶷の「少年行三首」（前出）其一にも「十八羽林郎、戎衣侍漢王」（十八の羽林郎、戎衣　漢王に侍る）の句がある。

杜甫には「自京赴奉先県詠懐五百字」（『詳註』巻四）に「瑤池気鬱律、羽林相摩戛」（瑤池　気は鬱律たり、羽林　相い摩戛す）というなど、「羽林」の形で四例の用例がある。張籍にはこの例のみ。

冒頭の二句、次の二句と同韻で、主人公である遊侠少年の生活を素描する部分の前半四句を構成する。ここでは最近羽林郎となったばかりの主人公の遊侠少年が登場、天子に侍って長楊宮で狩猟のお供をすることが述べられる。

3・4　独到輦前射双虎、君王手賜黄金璫

〔独到輦前射双虎〕たった一人、天子の御車の前に進み出て、二頭の虎を射た。

「輦」は皇帝の車。「輦前」その前で、というのは、天子のすぐ目の前でということであろう。「独到」の語があるのは、一人飛び抜けた手柄を立てたということとともに、この少年だけが特別扱いされていることをいうものかもしれない。

「輦前」はあまり用例の多くないことばだが、似たような状況の描写に用いられた例として、杜甫の「哀江頭」（『詳註』巻四）に「輦前才人帯弓箭、白馬嚼齧黄金勒」（輦前の才人　弓箭を帯び、白馬　嚼齧す　黄金の勒）という有名な句がある。女官の射る描写ではあるが、この詩と同じく「黄金」の語も用いられており、「双飛翼」が射落とされている。

二頭の虎を射るというのは、李白の「贈宣城宇文太守兼呈崔侍御」（王琦注本巻一二）に「閑騎駿馬猟、一射両虎穿」（閑に　駿馬に騎りて猟すれば、一射して　両虎穿たる）といい、同時代の李賀の「栄華楽」（王琦『李長吉歌詩彙解』巻四）に「天長一矢貫双虎、雲弛絶騁聒旱雷」（天長く　一矢双虎を貫き、雲弛　絶騁　旱雷　聒し）という例があるように、やはり一本の矢で二頭の虎を射抜いたというのであろう。他の動物の例では、梁の劉孝威の「結客少年場行」（『楽府詩集』巻六六）にも「近発連双兎、高彎落九烏」（近く発して　双兎を連ね、高く彎きて　九烏を落とす）の句がある。

なお、「独到」を百名家本・『文苑英華』等では「独対」に作っている。こちらであれば、天子の車に向き合ってということになろう。

〔君王〕天子。皇帝。常見の語。

陳注も引く『毛詩』小雅「斯干」に「朱芾斯皇、室家君王」（朱芾　斯れ皇たり、室家　君王とせん）の句が見えるほか、『礼記』『左伝』等の経書に見られる古いことばであり、『楚辞』招魂の乱にも「君王親発兮憚青兕」（君王　親しく発して　青兕を憚れしむ）とある。

文人の詩においても、魏晋以来極めて多くの用例があるが、ここでは李白の「清平調詞三首」其三（王琦注本巻三）に「名花傾国両相歓、長得君王帯笑看」（名花　傾国　両つながら相い歓ぶ、長えに　君王の　笑いを帯びて看るを得たり）という名高い例のみを挙げておく。

杜甫にも十例に及ぶ用例がある。一例を挙げれば、「留花門」（『詳註』巻七）に「公主歌黄鵠、君王指白日」（公主　黄鵠を歌い、君王　白日を指す）の句がある。張籍には他に五例、いずれも楽府の中に用いられている。一例を挙げれば、37「楚宮行」（巻一）に「江頭起火照輦道、君王夜従雲夢帰」（江頭　火を起こして　輦道を照らし、君王　夜　雲夢より帰る）の句がある。

〔手賜黄金璫〕天子自ら・金の璫を褒美として与える。

「手賜」、少年に対する天子の寵愛ぶりを示す表現であるが、詩における以前の用例は未見。

「璫」はここでは武官の冠の飾り。『楽府詩集』は「鐺」に作るが、通じて用いられる字である。諸注の引く『後漢書』輿服志下に「武冠、一曰武弁大冠、諸武官冠之。侍中・中常侍、加黄金璫、附蟬為文、貂尾為飾、謂之趙恵文冠」（武冠は、一に武弁大冠と曰い、諸武官　之を冠す。侍中・中常侍は、黄金の璫を加え、蟬を附して文と為し、貂尾を飾りと為し、之を趙恵文冠と謂う）とある。

「黄金璫（鐺）」は用例未見。ただ、冠の飾りとしての「璫」の用例は、傅咸の「贈何劭王済詩」（『文選』巻二五）に「金璫綴恵文、煌煌発令姿」（金璫　恵文に綴り、煌煌として　令姿を発す）といい、王維の「上張令公」（趙

本巻一二）に「珥筆趨丹陛、垂璫上玉除」（筆を珥りて　丹陛に趨き、璫を垂れて　玉除を上る）というなどの用例が見える。

なお、5「寄遠曲」（巻一）に「蘭舟桂楫常渡江、無因重寄双瓊璫」（蘭舟　桂楫　常に江を江を渡るも、重ねて双瓊璫を寄するに因る無し）の句が見え、そこでは女性の耳飾りの意味で「璫」の文字が用いられていた。張籍には他に一例、先に「君王」の部分で引いた「楚宮行」（前出）にも「璫」の文字が用いられているが、やはり耳飾りの意味のようである。杜甫には擬音語「鋃鐺」の用例が一例あるのみ。

続く二句、前の二句を承けて、一本の矢で二匹の虎を射殺すという神業を披露、天子から褒美をもらうことが描写される。前の二句とまとまって、遊侠少年の公の場における活躍ぶりと天子の寵愛が語られており、次の四句で私生活を描写しているのと対をなす。

5・6　日日鬬鶏都市裏、贏得宝刀重刻字

〔日日〕日々。毎日。常見の語。

『礼記』大学に引く湯王の盤の銘の有名なことば、「苟日新、日日新、又日新」（苟に日に新たに、日日に新たに、又た日に新たなり）など、古くから多くの用例があり、詩の用例も多い。ここでは、陶淵明の「止酒」（四部叢刊本巻三）に「日日欲止之、営衛止不理」（日日　之を止めんと欲するも、営衛　止むれば理まらず）といい、王昌齢の「万歳楼」（『全唐詩』巻一四二）に「年年喜見山長在、日日悲看水獨流」（年年　喜びて見る　山の長えに在るを、日日　悲しみて看る　水の獨流するを）という例を挙げておこう。

杜甫には「客至」（『詳註』巻九）に「舍南舍北皆春水、但見群鷗日日来」（舍南　舍北　皆な春水、但だ見る　群鷗の日日に来たるを）というなど、五例の用例があるようだ。張籍には他に五例、19「各東西」（巻一）にも「遠遊不定難寄書、日日空尋別時語」（遠遊　定まらず　書を寄せ難し、日日空しく尋ぬ　別時の語）の句があった。

この「日日」を『文苑英華』は「白日」に作っている。こちらであれば、真っ昼間からという意になろう。「白日」は詩に頻見する語。張籍も1「野居」・13「猛虎行」・17「求仙行」（以上巻一）等で用いていた。

〔鬬鶏〕ニワトリを戦わせる遊び。諸注が指摘するように、春秋時代から行われていた長い歴史のある遊戯である。

李冬生注は、『戦国策』斉策四に、「臨淄甚富而実、其民無不吹竽鼓瑟、擊筑弾琴、鬬鶏走犬、六博・蹋鞠者」（臨淄は甚だ富みて実ち、其の民　竽を吹き瑟を鼓し、筑を擊ち琴を弾き、鶏を鬬わせ犬を走らせ、六博・蹋鞠せざる者無し）という例を引き、陳注は『史記』袁盎伝に「袁盎病免居家、与閭里浮沈、相随行、鬬鶏走狗」（袁盎　病免して家に居り、閭里と浮沈し、相い随行して、鶏を鬬わせ狗を走らす）という例を引く。

李冬生注は、唐の時代に鬬鶏が盛んであった資料として『東城老父伝』（『太平広記』四八五）を引いている。その一部を挙げておこう。

玄宗在藩邸時、楽民間清明節鬬鶏戯。及即位、治鶏坊於両宮間、索長安雄鶏、金毫銕距、高冠昂尾千数、養於鶏坊、選六軍小児五百人、使馴擾教飼。

玄宗　藩邸に在りし時、民間の清明節の鬬鶏の戯を楽しむ。即位するに及んで、鶏坊を両宮の間に治め、長安の雄鶏の、金毫銕距、高冠昂尾なるもの千数を索め、鶏坊に養い、六軍の小児五百人を選んで、馴擾し教飼せしむ。

鬬鶏は遊侠少年につきものの遊びとして詩にしばしば詠じられる。古く曹植の「名都篇」（『文選』巻二七）に「鬬鶏東郊道、走馬長楸間」（鶏を鬬わす　東郊の道、馬を走らす　長楸の間）と詠じられているのも、少年に関わる例であるし、北周の王褒もこれに基づいて「遊侠篇」（『楽府詩集』巻六七）に「鬬鶏横大道、走馬出長楸」（鶏を鬬わせて　大道に横たわり、馬を走らせて　長楸を出づ）と表現している。

唐代では、陳子良の「遊侠篇」（『全唐詩』巻三九）に「東郊鬬鶏罷、南皮射雉帰」（東郊　鶏を鬬わせ罷り、南皮　雉を射て帰る）の句があり、盧照隣の「結客少年場行」（『全唐詩』巻四一）にも「鬬鶏過渭北、走馬向関東」（鶏を鬬わせて　渭北を過ぎ、馬を走らせて　関東に向かう）の句があり、李白の「白馬篇」（王琦注本巻五）に「鬬鶏事万乗、軒蓋一何高」（鬬鶏して　万乗に事え、軒蓋　一に何ぞ高き）の句があるなど、用例はさらに多い。

杜甫には一例、詩題も「鬬鶏」（『詳註』巻一七）という中に「鬬鶏初賜錦、舞馬既登床」（鬬鶏　初めて錦を賜い、舞馬　既に床に登る）の句がある。張籍の用例はこれのみ。

〔都市裏〕「都市」は繁華街、盛り場。

唐までの詩では、左延年の「秦女休行」（『楽府詩集』巻六一）に「殺人都市中、徼我都巷西」（人を殺す　都市の中、我を徼う　都巷の西）の例があり、傅玄のやはり「秦女休行」（同前）に「白日入都市、怨家如平常」の例があるのみ。

唐に入って用例が増える中、李白の「結客少年場行」（王琦注本巻四）には「笑尽一杯酒、殺人都市中」（笑って尽くす　一杯の酒、人を殺す　都市

の中）の句がある。

杜甫には「悲陳陶」（出典）に「群胡帰来血洗箭、仍唱胡歌飲都市」（群胡帰り来たりて　血もて箭を洗い、仍お　胡歌を唱いて　都市に飲む）というなど、三例の用例がある。張籍の用例はこれのみ。

「都市裏」を百名家本は「新市裏」（新市の裏）に作り、『文苑英華』は「傍新市」（新市に傍う）に作る（こちらであれば「市」は上声六止の韻字となる）。

「新市」であれば、「長安有狭斜行」古辞（『楽府詩集』巻三五）に「君家新市傍、易知復難忘」（君が家は　新市の傍、知り易く　復た忘れ難し）とあり、長安の街で出会った二人の「少年」の会話の中に「新市」のことばが用いられている。「傍新市」の場合は、押韻の関係でこの表現を倒置したものといえよう。

その後、沈烱の「長安少年行」（『楽府詩集』巻六六）にも「去来新市側、遨遊大道辺」（去来す　新市の側、遨遊す　大道の辺）といい、儲光羲の「洛陽道五首獻呂四郎中」其五（『全唐詩』巻一三九）にも「少年不得志、走馬遊新市」（少年　志を得ず、馬を走らせて　新市に遊ぶ）といい、やや後の例になるが、李廓の「長安少年行十首」其三（『全唐詩』巻四七九）にも「還携新市酒、遠醉曲江花」（還た携う　新市の酒、遠く醉う　曲江の花）というなど、遊侠少年と関わりの深い詩語となっている。

「新市」は杜甫に用例がなく、張籍にも他に例がない。

〔贏得〕勝ち取る。利益を得る。また、結局～を得たのみという意で用いられる。

中唐の頃から詩に用いられるようになったことばのようで、白居易の「重題」（一三二三）に「不能成一事、贏得白頭帰」（一事をも成す能わず、白頭を贏ち得て帰る）というなどの用例があるが、特に名高いのは、晩唐の杜牧の「遣懐」（『全唐詩』巻五二四）に「十年一覚揚州夢、贏得青楼薄倖名」（十年　一たび覚む　揚州の夢、贏ち得たり　青楼　薄倖の名）という例であろう。

「贏」、テキストが底本とする四部叢刊本および『文苑英華』は「嬴」に作る。テキストの注に、四部叢刊本が「嬴」と作っていたのを、『全唐詩』によって改めたことを記す。「嬴」は「贏」に通じて用いられるが、本来は趙・秦の姓。また静嘉堂本は「羸」に作る。「贏」はつかれる・よわいの意。

〔宝刀〕りっぱな刀。宝刀。これを闘鶏の賭に勝って手に入れるのである。『春秋』僖公元年の穀梁伝に見えるなど、古くから用いられることばであるが、梁の江淹の「歩桐台」（『江文通集彙注』巻三）に「綺帷生網羅、宝刀積塵埃」（綺帷　網羅を生じ、宝刀　塵埃を積む）と見えるなど、詩語として用いられるようになったのは、六朝の頃からのようである。

唐に入って、陳注も引く岑参の「送張郎中赴隴右観省卿公」（『全唐詩』巻二〇〇）に「弱冠已銀印、出身唯宝刀」（弱冠にして　已に銀印、出身　唯だ宝刀のみ）というなどの多くの例があるが、遊侠少年に関わる例としては、「闘鶏」の例としても引いた李白の「白馬篇」（前出）に「酒後競風采、三杯弄宝刀」（酒後　風采を競い、三杯　宝刀を弄す）の句がある。

杜甫に一例、「荊南兵馬使太常卿趙公大食刀歌」（『詳註』巻一八）に「吁嗟光禄英雄弭、大食宝刀聊可比」（吁嗟　光禄　英雄弭まん、大食の宝刀聊か比すべし）という。張籍にもう一例、197「贈王司馬」（巻四）に「蔵得宝刀求主帯、調成駿馬乞人騎」（宝刀を蔵し得て　主の帯びんことを求め、駿馬を調し成りて　人の騎るを乞う）の句がある。

なお、刀は遊侠少年必須アイテムの一つであり、遊侠少年を描いた作品の中には、「宝剣」「玉剣」といった別の詩語で表現されることも多い。

〔重刻字〕重ねて文字を刻みつける。徐注・李冬生注が指摘するように、賭で勝ち取った宝刀に、もともと字が刻してあった上から、新たに文字を刻むのであろう。

なお、両氏とも自分の「名字」を刻むと述べており、あるいは「字」の文字をあざなの意で解釈されたようだが、これに従えば、他人の宝刀を巻き上げて、すぐ自分の名前を刻む遊侠少年の料簡の狭さといったものが感じられる。ただ、「名字」に限定せず広く文字の意味でも解釈できるのではないだろうか。こちらで解すれば、自分の名前も含め、稚拙な銘文や馴染みの妓女の名前などを、他人から巻き上げた宝刀に得々として彫りつけている遊侠少年の様子が想像されよう。

「刻字」は用例の少ないことばのようで、張籍に先立つ例としては、王隠『晋書』（『藝文類聚』巻六二所引）に「高堂隆刻鄴宮屋材云、後若干年、当有天子居此宮。恵帝止鄴宮、治屋者土剥更泥、始見刻字、計年正合」（高堂隆　鄴宮の屋材に刻して云う、後　若干年、当に天子の此の宮に居る有るべし、と。恵帝　鄴宮に止まり、屋を治する者　土剥して泥を更め、始めて字を刻するを見るに、年を計れば正に合う）という例があるくらいのようである。名前ではなく、いつか天子がここに訪れるだろうと刻した例。詩においても唐までの詩には用例が見えず、『全唐詩』においても、張籍のこの例の他には、上官昭容の「駕幸三会寺応制」（『全唐詩』巻五）に「釈子談経処、軒臣刻字留」（釈子　経を談ずる処、軒臣　字を刻し留む）という例を見る

のみ。この例は単に軒臣が名前を記したとも、経を談論した経緯などをも記したとも考えられよう。また、『旧唐書』姚璹伝には、「請造天枢於端門外、刻字紀功、以頌周徳」（天枢を端門外に造り、字を刻して功を紀し、以て周の徳を頌せんことを請う）という記述がある。則天武后期の逸話で、当時の資料に基づいた表現かと思われるが、頌文を彫ることを「刻字」と表現している。

以上の例から見ると、少なくとも「刻字」という表現から、ただちに名前を刻するという意味に結びつくことはなかったようである。

次の二句と同韻でひとまとまり。前の四句で公の場での遊侠少年を描いたのを承け、詩的な場での遊侠少年を描く。その前半にあたるこの二句では、闘鶏の賭博で他人の宝剣を、巻き上げ、自分のものとする姿が描かれる。

7・8　百里報讐夜出城、平明還在娼楼醉

〔百里報讐〕百里かなたにいる仇に復讐する。

「報讐」は復讐すること。仇討ち。『左伝』（僖公十五年）にも見える古い語だが、詩における例は少なく、唐までの詩では、先に「都市」の例として引いた左延年の「秦女休行」（前出）に「休年十四五、為宗行報讐」（休年十四五、宗の為に　行きて讐に報ゆ）というなどわずかな例があるばかり。

ただ、【題解】に引いた曹植の「結客篇」に「怨に報ず　洛の北邙」の句があったように、復讎は遊侠少年につきものの行為であった。唐代に入ると「報讐」の詩語によって表現されることも多くなり、高適の「邯鄲少年行」（『全唐詩』巻二一三）に「千場縦博家仍富、幾度報讐身不死」（千場　博を縦にするも　家仍お富み、幾度か　讐に報ゆるも　身は死せず）といい、李益の「軽薄篇」（『全唐詩』巻二八二）に「少年但飲莫相問、此中報讐亦報恩」（少年　但だ飲みて　相い問う莫し、此の中　讐に報い　亦た恩に報いん）というなど、多くの例がある。

中でも、陳注も引く李白の「少年行」（王琦注本巻六）に「呼盧百万終不惜、報讐千里如咫尺」（呼盧して　百万　終に惜まず、讐に報いて　千里も咫尺の如し）と、博奕に金をつぎ込み、遠くの人にも復讐を忘れないことをいう例は、この詩の表現に影響を与えていよう。

杜甫には例がなく、張籍の例はこれのみである。

「報讐」を『全唐詩』は「報仇」に作る。こちらも『韓非子』（外儲説左下）等に見える古いことばだが、詩の用例はさらに少なく、同時期の元稹の「陽城駅」（『元稹集』巻二）に「公乃帥其属、決諫同報仇」（公　乃ち　其の属を帥い、諫を決して　同に仇に報ゆ）という例を見るのみのようである。

〔夜出城〕夜、町を出る。唐代は、特別の場合を除いて夜の通行が禁止されていたから、その禁を破って秘密裏に行動するのであろう。

「夜出城」という表現の詩における用例は他に見当たらないが、「夜出」は詩中にも例が散見するうち、張籍のもう一つの用例218「寒食内宴二首」其一（巻四）に「共喜拝恩侵夜出、金吾不敢問行由」（共に喜ぶ　恩を拝し夜を侵して出づるを、金吾　敢えて　行く由を問わず）というのも、夜間の通行が禁止されていたことを背景とした句のようである。

なお、杜甫に「夜出」の例は一例、「日暮」（『詳註』巻八）に「将軍別換馬、夜出擁雕戈」（将軍　別に馬を換え、夜出でて　雕戈を擁す）の句がある。

〔平明〕朝。夜明け。常見の語。

『荀子』（哀公）や『史記』（項羽本紀）等から見える古いことばで、唐までの詩でも、謝霊運の「入竦渓詩」（『北堂書鈔』巻一五八）に「平明発風穴、投宿憩雪巘」（平明　風穴を発し、投宿して　雪巘に憩う）といい、謝朓の「観朝雨」（『文選』巻三〇）に「平明振衣坐、重門猶未開」（平明　衣を振るいて坐するも、重門　猶お未だ開かず）というなど多くの用例がある。

唐詩においても用例の多いうち、崔顥の「代閨人答軽薄少年」（『全唐詩』巻一三〇）に「平明挾弾入新豊、日晚揮鞭出長楽」といい、李白の「結客少年場行」（前出）に「平明相馳逐、結客洛門東」（平明　相い馳逐し、客と結ぶ　洛門の東）という例は、遊侠少年に関する例である。陳注は、王昌齢の「芙蓉楼送辛漸二首」其一（『全唐詩』巻一四三）の「寒雨連天夜入湖、平明送客楚山孤」（寒雨　天に連なりて　夜湖に入り、平明　客を送りて　楚山孤なり）の有名な句を引いている。

杜甫に二例のうち、「虢国夫人」（『詳註』巻二）に「虢国夫人承主恩、平明上馬入宮門」（虢国夫人　主恩を承け、平明　馬に上りて　宮門に入る）という句はよく知られている。張籍の例はこれのみ。

「平明」を四庫全書本は「天明」に作る。こちらも古くから頻繁に用いられる語。意味はほとんど変わらない。

〔還在娼楼醉〕帰ってきて妓館で酔っている。翌朝にはちゃんと戻ってきて、妓楼で酒を飲んでいる。

「娼楼」は妓館、妓女のいる遊女屋。『文苑英華』・『唐文粋』等は「倡楼」に作るが、同じ。

唐までの詩では、隋の盧思道の「夜聞隣妓詩」（『藝文類聚』巻四二）に「娼

楼対三道、吹台臨九重」という一例を見るのみ。唐に入って盧照隣の「折楊柳」（『全唐詩』巻四二）に「倡楼啓曙扉、楊柳正依依」（倡楼　曙扉を啓けば、楊柳　正に依依たり）といい、駱賓王の「櫂歌行」（『駱臨海集箋注』巻二）に「秋帳灯華翠、倡楼粉色紅」（秋帳　灯華翠に、倡楼　粉色紅なり）というなど、用例が多くなる。

杜甫には用例がなく、張籍にはもう一例、38「江南曲」（巻一）に「娼楼両岸臨水柵、夜唱竹枝留北客」（娼楼　両岸　水柵に臨み、夜　竹枝を唱いて　北客を留む）という用例がある。

娼楼の語は用いられていないが、曹植の「名都篇」（前出）の冒頭に「名都多妖女、京洛出少年」（名都に　妖女多く、京洛　少年を出だす）とあるように、美女や妓女も遊侠少年と関わりの深いものの一つである。特に李白の「少年行二首」其二（王琦注本巻六）に「落花踏尽遊何処、笑入胡姫酒肆中」（落花　踏み尽くして　何れの処にか遊ぶ、笑って入る　胡姫　酒肆の中）の例は名高いが、同じ李白の「少年子」（同前巻六）に「金丸落飛鳥、夜入瓊楼臥」（金丸　飛鳥を落とし、夜　瓊楼に入りて臥す）の例は、昼間ははじき弓で鳥を落とし、夜には妓楼に上がり込んで歓楽を尽くすという姿が詠じられ、この詩と似た表現といえよう。

この二句について徐注は、麦鉄杖という人物の故事を用いているのではないかと指摘する。『隋書』麦鉄杖伝によれば、麦鉄杖という人物は、勇気にあふれ腕力があり、日に五百里を走って、奔馬に追いつくほどであった。交遊を好み信義を重んずる人物であり、陳の太建年間、群盗に加わっていたところを広州刺史に見出されて、天子の傘をつかさどる役人となっていたという。それに続いて、以下のように記されている。

毎罷朝後、行百余里、夜至南徐州。踰城而入、行光火劫盗。旦還及時、仍又執傘。如此者十余度、物主識之、州以状奏。朝士見鉄杖毎旦恒在、不之信也。

毎に朝を罷めて後、行くこと百余里、夜に南徐州に至る。城を踰えて入り、光火を行いて劫盗す。旦に還りて時に及び、仍お又た傘を執る。此くの如きこと十余度、物主　之を識り、州　状を以て奏す。朝士　鉄杖の旦毎に恒に在るを見れば、之を信ぜざるなり。

この麦鉄杖は、夜ごと百里離れた南徐州で盗賊をはたらき、翌朝にはそしらぬ顔で朝廷に出勤していたという人物だが、その距離と、翌朝には帰っていたという記述が張籍のこの詩と一致する。盗賊を遊侠少年にふさわしい復讐としたところに張籍の工夫が見られるといえようか。

また、先に述べたように、この句は李白の「讐に報いて　千里も　咫尺の如し」や「金丸　飛鳥を落とし、夜　瓊楼に入りて臥す」の句からも影響を受けていると思われるが、李白の前者が千里の距離も物ともしないと、大きな数字を出すことによって強調していたのに対し、張籍の百里は、麦鉄杖の故事に基づいて、遠いながらも現実味のある距離となっており、表現がリアルになっているといえよう。また、後者に対しても、鳥を落とすといういたずら・遊びであったのが復讐となるに伴って、妓楼に上る時間も昼夜逆転し、深夜秘密裏に殺人を犯した殺し屋が、女遊びで現実逃避するというような、リアルな表現になっているように思われる。

続く二句、前の部分に続いて、私的な場での少年の生活ぶりを描く。百里の距離をものともせず、闇に紛れて復讐を遂げ、明け方には帰って、馴染みの芸者のもとに転がり込む。

9・10　遥聞虜到平陵下、不待詔書行上馬

〔遥聞虜到平陵下〕はるか平陵に異民族が侵入したという情報を聞きつける。

「遥聞」は、遠くの噂を聞きつけること。遠くまで音が聞こえる意味でも用いられるが、ここでは遠い平陵からの情報を入手する意で用いられている。

「平陵」は漢の昭帝の陵墓。長安の西北郊外、現在の西安市の市街地から三〇キロほどのところ（咸陽市）にある。「遥聞」というほど遠距離ではなく、かなり長安に迫っているともいえようが、次の句にいうように、まだ迎撃態勢に入るほどの距離ではないのであろう。

諸注、『漢書』地理志上「右扶風」の条に、右扶風所属の二十一の県を挙げる中に、「平陵」があるのを挙げている。また、李冬生注は、同じく『漢書』昭帝紀の元平元年の条に「夏四月癸未、帝崩於未央宮。六月壬申、葬平陵」（夏四月癸未、帝　未央宮に崩ず。六月壬申、平陵に葬る）といい、その注に、「臣瓚曰、自崩至葬、凡四十九日。平陵在長安西北七十里」（臣瓚曰く、崩より葬に至るまで、凡そ四十九日。平陵は長安の西北七十里に在り）とあるのを引いている。

ここで平陵が用いられているのは、五陵の一つだからであろう。五陵は漢の高帝以下五帝の陵墓で、長陵（高帝）・安陵（恵帝）・陽陵（景帝）・茂陵（武帝）・平陵（昭帝）をいう。ここに豪族を住まわせたことから、五陵の少年は遊侠少年の代表となって詩に登場する。先に後半を引いた李白の「少年行二首」其二（前出）の前半には「五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風」（五陵の年少　金市の東、銀鞍　白馬　春風を度る）という例は最も有名である。

なお、「五陵」については、植木久行氏「詩語『五陵』考―一地名の多義的用法をめぐって」（『古田教授退官記念中国文学語学論集』東方書店、一九八五年）に詳しい。

「平陵」の語は唐以前から唐までの詩に多くの用例があるが、その中にも、梁の王筠の「侠客篇」（『楽府詩集』巻六七）に「晨馳逸広陌、日暮返平陵」（晨に馳せて　広陌を逸れ、日暮　平陵に返る）といい、韋応物の「寇季膺古刀歌」（『全唐詩』巻一九五）に「古刀寒鋒青槭槭、少年交結平陵客」（古刀の寒鋒　青くして槭槭たり、少年　交わりを結ぶ　平陵の客）といい、李益の「軽薄篇」（前出）に「忽聞燕雁一声去、回鞍挾弾平陵園」（忽ち聞く燕雁の　一声にして去るを、鞍を回らし　弾を挾む　平陵の園）というなど、遊侠少年に関係する例が散見される。

すなわち、少年にとって平陵は出身地（あるいは出身地の五陵の一つ）であり、そこに異民族が侵入してくるのは、黙って見過ごす訳にはいかないことなのであろう。

〔不待詔書〕詔書も待たないで。迎撃せよというみことのりが出る前に。

「詔書」はみことのりの文書。天子の命令書。『史記』等にも見える古いことば。

詩における用例は、里諺や童謡の例を除けば、唐までの詩には二例のみ、梁の戴暠の「従軍行」（『楽府詩集』巻三二）に「詔書発隴右、召募取関西」（詔書　隴右に発し、召募　関西に取る）と見え、徐陵の「驄馬駆」（『楽府詩集』巻二四）に、「塞外多風雪、城中絶詔書」（塞外　風雪多く、城中　詔書絶ゆ）と見える。

唐詩においては、張九齢の「初発道中贈王司馬兼寄諸公」（『全唐詩』巻四九）に「不意棲愚谷、無階奉詔書」（意わざりき　愚谷に棲みて、階無きに詔書を奉ぜんとは）というなど、初唐から多くの用例があるが、王維の「老将行」（趙本巻六）に「節使三河募年少、詔書五道出将軍」（節使　三河より年少を募り、詔書　五道　将軍出づ）という例は少年（年少）とともに用いられている。

杜甫に一例、「送従弟亜赴安西判官」（『詳註』巻五）に「詔書引上殿、奮舌動天意」（詔書　引きて殿に上らしめ、舌を奮いて　天意を動かす）という句がある。張籍にもう一例、453「献従兄」（巻七）に「詔書近遷移、組綬未及身」（詔書　遷移近きも、組綬　未だ身に及ばず）という。

「詔書」を『文苑英華』は「勅書」に作っている。勅は勅・敕に同じ。こちらは唐までの詩に用例のないことば。唐詩においても用例はわずかだが、杜甫に一例、「送楊六判官使西蕃」（『詳註』巻五）に「敕書憐賛普、兵甲望長安」（敕書　賛普の、兵甲して　長安を望むを憐れむ）の句がある。張籍には用例がない。

〔行上馬〕早くも馬に乗っている。単身出撃するのである。

「行」の文字、具体的には馬に駆け寄ってということかもしれないが、ニュアンスとしては、徐注にいうように「すぐに」ということであろう。

「上馬」は馬に乗ること。『史記』項羽本紀に「於是項王乃上馬騎」というなど、古く方用例があることば。ただ、唐までの詩においては、梁の「折楊柳歌辞」（『楽府詩集』巻二五）に「上馬不捉鞭、反折楊柳枝」（馬に上りて　鞭を捉らず、反って折る　楊柳の枝）の句があり「折楊柳枝歌」（同前）にほぼ同じ句が見えるほかは、庾信の「見遊春人詩」（『庾子山集注』巻四）に「連杯勧上馬、乱菓擲行車」（杯を連ねて　馬に上るを勧め、乱菓　行車に擲つ）という例を見るのみ。

唐詩においては、李嶠の「汾陰行」（『全唐詩』巻五七）に「埋玉陳牲礼神畢、挙麾上馬乗輿出」（玉を埋め　牲を陳ねて　神に礼し畢り、麾を挙げ馬に上り　輿に乗りて出づ）といい、李白の「王昭君二首」其二（王琦注本巻四）に「昭君払玉鞍、上馬啼紅頰」（昭君　玉鞍を払い、馬に上りて　紅頰啼く）というなど、用例が多くなる。杜甫に五例の用例があるうち、「虢国夫人」（前出）に「平明上馬入宮門」（平明　馬に上りて　宮門に入る）という例は先に引いた。張籍の用例はこれのみ。

なお、古く曹植に詩の冒頭二字から名付けた「白馬篇」があるように、馬も遊侠少年の必須アイテムの一つである。張籍の8「白紵歌」（巻一）に詠じられる少年も、白馬に乗っていた。

この二句で一韻となっているが、最後までひとつながりと考えてよいであろう。前の部分で遊侠少年の生活を描いたのに対し、この二句である事件が発生し、以下の部分でその顛末を述べる。異民族が侵入したと聞きつけた少年は、早速馬に跨って現場へと急行する。

11・12　斬得名王献桂宮、封侯起第一日中

〔斬得名王〕名王の首を切ることができる。

「名王」は、匈奴の諸王のうちで、名声の高い王をいうことば。『漢書』宣帝紀神爵二年の条に「匈奴単于遣名王奉献、賀正月、始和親」（匈奴単于名王を遣わして奉献し、正月を賀せしむ）とあり、顔師古の注に「名王者、謂有大名、以別諸小王也」（名王とは、大名有るを謂い、以て諸小王と別つなり）という。

唐までの詩においては、隋の煬帝の「白馬篇」（前出）に「輪台令降虜、高闕翦名王」（輪台　降虜に令し、高闕　名王を翦る）という例を見るのみ。

唐詩においては、盧従愿の「奉和聖製送張説巡辺」（『全唐詩』巻一一一）に「佇聞歌杕杜、凱入繫名王」（佇みて聞く　杕杜を歌うを、凱して入り　名王を繫ぐ）といい、王維の「従軍行」（趙本巻二）に「尽繫名王頸、帰来献天子」（尽く　名王の頸を繫ぎ、帰り来たりて　天子に献ぜん）というなど、用例が多くなる。

杜甫にも一例、「前出塞九首」其八（『詳註』巻二）に「虜其名王帰、繫頸授轅門」（其の名王を虜にして帰り、頸を繫ぎて　轅門に授く）の句がある。張籍にもう一例、417「塞上曲」（巻七）に「烏孫国乱多降胡、詔使名王持漢節」（烏孫　国乱れて　降胡多く、詔して名王をして　漢節を持たしむ）という。

名王を『文苑英華』は「戎王」に作る。

唐までの詩においては、漢の「折楊柳行古辞」（『楽府詩集』巻三七）に「戎王納女楽、以亡其由余」（戎王　女楽を納れ、以て　其の由余を亡ぼす）という例を見るのみ。

唐詩にも例は少ないが、張説の「奉和聖製送金城公主適西蕃応制」（『全唐詩』巻八七）に「戎王子婿寵、漢国舅家慈」（戎王　子婿の寵、漢国　舅家の慈しみ）の句があるほか、杜甫の「陪鄭広文遊何将軍山林十首」其三（『詳註』巻二）に「万里戎王子、何年別月支」（万里　戎王子、何れの年にか　月支に別る）の句がある。ただしこれは「戎王子」という植物の名の例。張籍には例がない。

〔献桂宮〕桂宮は漢代の宮殿の名。未央宮の北にあり、明光殿や柏梁台があった。

諸注、『三輔黄図』漢宮の「桂宮、漢武帝造。周回十余里」（桂宮は、漢の武帝造る。周回十余里なり）という記述を引いている。李冬生注はさらに『水経注』渭水下の部分に「未央宮北、即桂宮也。周十余里、内有明光殿・走狗台・柏梁台、旧乗複道、用相逕通」（未央宮の北は、即ち桂宮なり。周十余里、内に明光殿・走狗台・柏梁台有り、旧　複道に乗じて、用て相い逕通す）という記述と、『西京雑記』に「武帝為七宝床・雑宝案・厠宝屏風・列宝帳、設於桂宮。時人謂四宝宮」（武帝　七宝床・雑宝案・厠宝屏風・列宝帳を為り、桂宮に設く。時人　之を四宝宮と謂う）という記述を引いている。

唐までの詩にもしばしば詠じられ、謝霊運の「日出東南隅行」（『楽府詩集』巻二八）に「柏梁冠南山、桂宮燿北泉」（柏梁　南山に冠く、桂宮　北泉に燿く）といい、謝朓の「雑詠五首」其二「燭」（『玉臺新詠』巻四）に「杏梁賓未散、桂宮明欲沈」（杏梁　賓未だ散ぜず、桂宮　明は沈まんと欲す）というなどの用例がある。

唐詩における用例はあまり多くないが、虞世南の「奉和幽山雨後応令」（『全唐詩』巻三六）に「肅城隣上苑、黄山邇桂宮」（肅城　上苑に隣し、黄山　桂宮に邇し）といい、李乂の「奉和七夕両儀殿会宴応制」（『全唐詩』巻九二）に「桂宮明月夜、蘭殿起秋風」（桂宮　明月の夜、蘭殿に　秋風起こる）というなどの用例がある。

用例を見る限り、戦功を報告したり政務を執ったりする場所ではなく、皇帝の私室に近いイメージがあったようである。天子の寵愛を受ける少年が招き入れられるのにふさわしい場所であり、嗅覚にも訴える高雅な名称の宮殿であることもあって、ここに用いられたのであろうか。

杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

〔封侯起第一日中〕その日のうちに、侯に封ぜられ、邸宅を建てる。名王の首を取った功績を認められて、爵位と邸宅が恩賜されるのである。

「封侯」は侯に封ぜられること。古く『荀子』『荘子』等にも見える常見の語。

後漢末の童謡にも用例があるが、文人の詩においては、徐悱の「古意酬到長史漑登琅邪城詩」（『文選』巻二二）に「寄言封侯者、数奇良可嘆」（言を寄す　侯に封ぜらるる者、数奇　良に嘆くべしと）というなど、梁の頃から用例が見え始めるようだ。王褒の「牆上難為趨」（『楽府詩集』巻四〇）に「廷尉十年不得調、将軍百戦未封侯」（廷尉　十年　調せらるるを得ず、将軍　百戦　未だ侯に封ぜられず）という例は、次の句に見える「百戦」の語も用いられている。

唐詩に多くの用例があるうち、楊炯の「紫騮馬」（『全唐詩』巻五〇）に「匈奴今未滅、画地取封侯」（匈奴　今未だ滅ばず、地を画して　封侯を取る）という例は、侠客に関する例。また、王昌齢の「閨怨」（『全唐詩』巻一四三）に「忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯」（忽ち見る　陌頭　楊柳の色、悔ゆらくは　夫婿をして　封侯を覓めしめしを）の例は、『唐詩選』にも収められて人口に膾炙する。

杜甫に六例、一例を挙げれば、陳注も引く「後出塞五首」其一（『詳註』巻四）に「男児生世間、及壮当封侯」（男児　世間に生まる、壮に及んでは当に侯に封ぜらるべし）という。張籍の例はこれのみ。

「起第」は家を建てること。ここでは天子により豪邸を建ててもらうのである。

古い用例のあまりないことばで、陳注は『晋書』慕容超載記に「徳無子、

欲以超為嗣、故為超起第於万春門内、朝夕観之」（〔慕容〕徳　子無く、超〔徳の兄の子〕を以て嗣と為さんと欲し、故に超の為に第を万春門の内に起こし、朝夕　之を観る）という例を引く。

詩においても、唐までの詩にも『全唐詩』にも他に用例がなく、張籍のこの例一例を見るのみ。

なお、『文苑英華』は「起宅」に作る。こちらは『論衡』・『世説新語』等に用例があるが、詩における用例は未見。

次の二句と同じ韻でひとまとまり。前の二句で異民族の侵入が述べられたのを承け、遊侠少年が見事に異民族の王の首を切って皇帝に献上、その功績が認められてただちに爵位と邸宅が与えられることが描写される。

13・14　不同六郡良家子、百戦始取辺城功

〔不同六郡良家子〕六郡の良家の子弟と異なっている。

「不同」を静嘉堂本・百名家全集本・『文苑英華』等は「不為」に作るが、徐注のいうように、「不同」の方がよいであろう。

「六郡良家子」は、漢代に羽林郎が六つの特定の郡の良家の子弟から選ばれていたことをいう。その六郡とは、先に「羽林郎」の語釈に引いた『後漢書』では「漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河」の六郡であったが、漢の時代では「隴西・天水・安定・北地・上郡・西河」の六郡である。漢陽郡は、後漢になってできた郡で、漢代では天水郡に属していた。いずれも西北方の辺境に近い郡であり、異民族の居住地と近かったため、普段から軍事訓練を積み、意気盛んで狩猟を好んだということから、羽林郎の候補となったようである。そういった土地柄のせいか、悪事を行う者もいたようで、良家の子弟に限ったのは、素行の悪い者をふるい落とす意味があったのかも知れない。

そういった事情を『漢書』地理志下に次のように説明している。

天水・隴西、山多林木、民以板為室屋。及安定・北地・上郡・西河、皆迫近戎狄、脩習戦備、高上気力、以射猟為先。（中略）漢興、六郡良家子、選給羽林・期門、以材力為官、名将多出焉。孔子曰、君子有勇而亡誼則為乱、小人有勇而亡誼則為盗。故此数郡、民俗質木、不恥寇盗。

天水・隴西は、山に林木多く、民　板を以て室屋と為す。及び安定・北地・上郡・西河は、皆な　戎狄に迫り近く、戦備を脩め習い、気力を高上して、射猟を以て先と為す。（中略）漢興り、六郡の良家の子、選ばれて羽林・期門に給せられ、材力を以て官と為り、名将　多く出づ。孔子曰く、君子　勇有りて誼亡ければ則ち乱を為し、小人　勇ありて誼亡ければ則ち盗と為る、と。故に此の数郡、民の俗は質木にして、寇盗を恥じず。

中間部分には、この地方の気風を表す『毛詩』秦風の詩が引かれているが、中略した。この中の「六郡良家子、選給羽林・期門」の部分の注に、「如淳曰、医商賈百工不得豫也。師古曰、六郡謂隴西・天水・安定・北地・上郡・西河」（如淳曰く、医・商賈・百工は豫かるを得ざるなり。師古曰く、六郡は隴西・天水・安定・北地・上郡・西河を謂う）と注されている。

「六郡」、唐までの詩では、梁の虞羲の「詠霍将軍北伐」（『文選』巻二一）に「雲屯七萃士、魚麗六郡兵」（雲のごとく屯す　七萃の士、魚のごとく麗なる　六郡の兵）といい、劉孝威の「結客少年場行」（『楽府詩集』巻六六）に「少年本六郡、遨遊遍五都」（少年　本六郡、遨遊して　五都に遍し）というなどの用例がある。

唐詩においても、陳子良の「讃徳上越国公楊素」（『全唐詩』巻三九）に「六郡多壮士、三辺豈足平」（六郡に　壮士多し、三辺　豈に平らぐるに足らんや）といい、李益の「従軍有苦楽行」に「侠気五都少、矜功六郡良」（侠気五都に少なく、功を矜る　六郡の良）というなどの例がある。ただ、盛唐詩人の例は見当たらないようで、杜甫にも用例がない。張籍の用例はこれのみ。

『文苑英華』は「六郡」を「北郡」に作り、こちらであれば北方の郡ということになろうが、羽林郎の故事からして、「六郡」の方がよいであろう。「北郡」でまとまる用例は、唐までの詩にも『全唐詩』にも見えないようだ。

「良家」の語は、『管子』等にも見えるが、やはり羽林郎の故事に基づいていよう。

唐までの詩においては、范雲の「数名詩」（『藝文類聚』巻五六）に「六郡良家子、慕義軽従軍」（六郡　良家の子、義を慕いて　従軍を軽んず）といい、隋の王冑の「白馬篇」（『楽府詩集』巻六三）に「良家選河右、猛将征西山」（良家　河右より選ばれ、猛将　西山に征す）というなどの用例がある。先に挙げた庾信の「冬狩行四韵連句応詔詩」（前出）にも「三川羽檄馳、六郡良家選」（三川　羽檄馳せ、六郡　良家選ばる）の句がある。いずれも兵士や狩猟の名手が六郡の良家から選ばれたことをいう例。

唐に入ってからは、初唐に例がないようで、杜甫に至って三例の用例が見える。そのうち、一例は女性についての例で、先に其一を挙げた「後出塞」五首（前出）の其五に「我本良家子、出師亦多門」（我本　良家の子、出師亦た門多し）の句があるのは、兵士に関わる例。もう一例、「悲陳陶」（『詳註』巻五）に「孟冬十郡良家子、血作陳陶沢中水」（孟冬　十郡　良家の子、血は　陳陶沢中の水と作る）という例も兵士の例であるが、「十郡」の語を

用いて表現を工夫する。張籍にもう一例、34「妾薄命」（巻一）に「薄命嫁得良家子、無事従軍去万里」（薄命　嫁し得たり　良家の子、無事にして従軍し　去ること万里）という句がある。この「良家子」も、戦功を夢見て従軍する兵士である。

「良家」を静嘉堂本は「民家」に作る。誤りであろう。詩中に用例を見ないことば。

〔百戦始取辺城功〕何度も何度も戦って、やっと戦功を挙げる。遊侠少年が、ふとしたはずみで羽林郎となり、さらに功績を挙げて天子の恩寵を享受するのに対し、正規のルートで羽林郎となるには、並々ならぬ苦労が必要である。

「百戦」、『孫子』謀攻に「知彼知己者、百戦不殆」（彼を知り己を知る者は、百戦　殆うからず）の有名な文章があるように、古くから多くの用例があることば。

唐までの詩においては、「木蘭詩」古辞二首其一（『楽府詩集』巻二五）に「将軍百戦死、壮士十年帰」（将軍　百戦して死し、壮士　十年にして帰る）といい、張正見の「従軍行」二首其一（『楽府詩集』巻三二）に「故人軽百戦、聊欲定三斉」（故人　百戦を軽んじ、聊か　三斉を定めんと欲す）というなどの例がある。先に引いた「王褒」の「牆上難為趨」にも「将軍百戦未封侯」（将軍　百戦　未だ侯に封ぜられず）の句があった。

唐詩にも多くの用例がある中で、李昂の「従軍行」（『全唐詩』巻一二〇）に「城南百戦多苦辛、路傍死臥黄沙人」（城南　百戦　苦辛多し、路傍　黄沙に死臥するの人）という例や、『唐詩選』にも収められる王昌齢の「従軍行七首」其四（『全唐詩』巻一四三）に「黄沙百戦穿金甲、不破楼蘭終不還」（黄沙　百戦　金甲を穿つも、楼蘭を破らずんば　終に還らず）という例は、百戦の苦労を詠じた例である。

杜甫には「憶弟二首」其二（『詳註』巻六）に「百戦今誰在、三年望汝帰」（百戦　今誰か在る、三年　汝の帰るを望む）というなど、三例の用例がある。張籍の用例はこれのみ。

「始取」、『文苑英華』は「乃取」に作る。ほとんど意味は変わらない。

「辺城」、2「西州」（巻一）に「羌胡拠西州、近甸無辺城」（羌胡　西州に拠り、近甸に　辺城無し）と見えた。その【語釈】をも参照。また、10「寄衣曲」に「高堂姑老無侍子、不得自到辺城裏」（高堂　姑老いて　侍子無く、自ら辺城の裏に到るを得ず）の例もあった。

ここでは、遊侠少年や戦功または戦場に関わる楽府の例を追加しておこう。曹植の「白馬篇」（前出）に「辺城多警急、胡虜数遷移」（辺城多警急、胡虜数遷移）の句があり、これを劉孝威の「結客少年場行」（前出）では「辺城多警急、節使満郊衢」（辺城多警急、節使満郊衢）と用いている。また、王褒の「従軍行二首」其二（『楽府詩集』巻三二）には「荒戍唯看柳、辺城不識春」の句がある。

唐に入っても、李白の「行行且遊猟篇」（王琦注本巻三）に「辺城児、生年不読一字書、但知遊猟誇軽趫」（辺城の児、生年　読まず　一字の書、但だ遊猟を知り　軽趫を誇る）といい、盧綸の「従軍行」（『全唐詩』巻二七八）に「二十在辺城、軍中得勇名」（二十にして　辺城に在り、軍中　勇名を得たり）というなど、多くの用例がある。

ただ、「辺城功」は、張籍のこの句以外には用例が見出せなかった。

結びの二句、前の二句と一韻をなす。末尾に至って、正規の段取りを踏んで羽林郎になる「良家子」が登場、彼の人生が遊侠少年と対比され、遊侠少年の人生が幸運で安易なものであることが印象づけられる。

【補】

一　「少年行」の構成

この詩は、押韻の上からは、1～4／5～8／9・10／11～14の四段に分けられるが、意味の上からは次の三段に分けることができよう。

1～4　少年の素描①（公の場での活躍と天子の寵愛ぶり）
5～8　少年の素描②（私的な場での奔放な生活ぶり）
9～14　少年の戦功と作者の主張（戦功を挙げた少年と「良家子」との対比）

1～8を一つにまとめて、大きく前半後半の二段に分けることもできるだろう。

二　張籍「少年行」の特徴

ここで、張籍の「少年行」が、遊侠少年を詠じた詩の中で、どのような特徴を持っているかについて触れておこう。なお、遊侠少年を描いた作品は数多く、【題解】に挙げた「欠客少年場行」の系譜に連なる楽府だけでなく、「白馬篇」「軽薄篇」「遊侠篇」などの楽府題もあり、さらに徒詩の中にも多くの遊侠少年の姿が詠じられている。それら全てに目配りすることは筆者の手に余るため、あるいはここで述べる張籍「少年行」の特徴と同じ特徴を持つ他

の作品があるかもしれないが、ひとまず管見を記しておきたい。

【題解】で引いた『楽府詩集』の解題が紹介する資料のうち、『楽府解題』は、命を軽んじて義を重んじ、慷慨して功名を立てることを詠ずるのが「結客少年場行」であるとしているのに対し、『広題』では、若くして侠客と交わって歓楽を尽くし、結局は何を成すこともない者を詠ずるのが「結客少年場行」であると規定する。

この二つの説は一見矛盾しているようだが、実際の作品においては、「結客少年場行」に限らず、遊侠少年を詠ずる作品、特に長篇のものには確かにこの両者がある。繁華街で豪遊し、賭博や狩猟に明け暮れる若者が、辺境有事の際にはただちに出陣し、大きな戦功を挙げるという、サクセスストーリーというべきものがある一方、飲む・打つ・買うの三拍子、勇を誇って人殺しを何とも思わず、傍若無人・勝手放題に振る舞うという、若者の無軌道ぶりを描くものもあるのである。

しかしこれは、いわば硬貨の両面のようなものであろう。平生の無頼は、簡単に戦場での勇敢、引いては戦功に転換するものである。無軌道な若者は英雄の予備軍なのである。だから、古く曹植の「白馬篇」が少年の成功物語、「名都篇」が少年を批判する作とされているように、同じ詩人であっても、時には少年を批判的に描き、時にはその成功を描くことも珍しくなかったのである。

さらに、作者がたとえ無頼の若者を批判する意図で作品を作り、例えばその傍若無人さを並べ立て、結末に無法者の惨めな最期を描いたとしても、読者がそのまま受け入れるかどうかは別問題であり、逆にその奔放で純粋ともいえる人生の方に共感を覚えるかもしれない。

その意味で、遊侠少年というのは、いわばブレのある題材であり、含蓄のあるテーマであったともいえ、詩人たちにとって魅力のある材料だったであろう。

こういった状況の中で、詩人たちは、自分なりの工夫を加えた遊侠少年像を描こうとしてきた。「長安」「渭城」「邯鄲」といった地名を冠した楽府題が作り出されたのも、地方色を加味した作品を作ろうという思いの現れであったろう。また、例えば庾信の「結客少年場行」（前出）は女性の立場から少年を描き、李白の有名な「少年行二首」其二（前出）は遊侠少年の生活の一場面を切り取って見せ、杜甫の「少年行二首」其一（『詳註』巻一〇）では少年に対して田家の生活の楽しみを語るなど、さまざまな工夫を凝らして自分なりの遊侠少年を描いている。それらの作品には、例えば李白の「少年行二首」其二がある注釈書では批判、別のものでは共感のニュアンスで解されるように、ブレのある遊侠少年像をそのまま用いるものもあれば、ブレをなくす方向で描くものもあるようである。

張籍のこの詩にも、やはり張籍なりの工夫が凝らされているように思われる。そのうち細かな気づきについては、【語釈】の中で適宜触れておいたが、大きな点として挙げられるのは、末尾の「良家子」との対比であろう。

1～12句までに描かれる遊侠少年は、他人の宝剣にすぐ名前を記すといった面もあるものの、明らかに批判的な描写を行っているとはいえない。自由奔放に暮らし、戦場では大活躍する、粋がった少年の姿に共感を抱く読者もいるかもしれない。ここまでは、張籍はブレのある少年像を描いてきたといえるだろう。しかし、最後に「良家子」が登場することによって、それまで描かれてきた遊侠少年の人生は比較の対象となり、遊侠少年像のブレはなくなる。劇的ではあるが安直な遊侠少年の人生が、正規の手続きを踏みながら苦労して出世する人々と比較されることによって、鮮やかに批判されることになるのである。

張籍の楽府の末尾の二句の重要性については、これまでにもしばしば触れたが、この詩においても大きな意味を持っていよう。これまでの詩にしばしば見えた、換韻によって最後の二句を際だたせる手法はとられていないが、単に無頼ぶりだけを述べ立てることによって批判するよりも、強い印象を読者に与える作品になっており、張籍の「少年行」の斬新さは、この点にあるといえるのではないだろうか。

この、戦場で苦労しながら遅い出世を待つという姿は、本来「行路難」や「従軍行」といった、別の楽府題のもとに描かれるのが一般的であったろう。しかし、そういった楽府題を用いて他の詩人と似たり寄ったりの作品を作るよりも、「少年行」という別の楽府題を用い、遊侠少年の傲慢な人生を描いた上で比較することによって、「良家子」の人生が一層鮮明に印象づけられる。また、「行路難」や「従軍行」といった楽府を下敷きとして、読者に共通理解があっただろうから、長々と「良家子」の人生を描く必要はない。末尾の二句で十分であり、寸鉄人を殺すようなシャープな結びとすることもできる。張籍はそういった効果をねらったのであろう。

張籍自身、官僚としては長い下積みの時代を経験した人であった。彼から見れば無能な人物が、つまらぬきっかけでとんとん拍子に出世し、自分を踏み越えてゆく姿を、苦々しい思いで見つめたことも多かったであろう。しかし、彼にとっては地道に日々を生きてゆくしか手だてはなかった。そういった思いが、この末尾の二句に込められているのではないだろうか。

三　王建「羽林行」

この張籍の「少年行」に似て、ブレをなくす方向で無頼の遊侠少年を批判的に描いた王建の作に「羽林行」（『王建詩集』巻二）がある。これは、楽府題「羽林郎」（『楽府詩集』巻六三）の変形とされ、これまでしばしば触れた朱炯遠氏「張王楽府唱和」の「異題唱和」にも含まれていないものだが、ここで紹介しておきたい。

1 長安悪少出名字　　長安の悪少　名字を出だす
2 楼下劫商楼上酔　　楼下に商を劫し　楼上に酔う
3 天明下直明光宮　　天明　直より下る　明光宮
4 散入五陵松柏中　　散じて入る　五陵　松柏の中
5 百回殺人身合死　　百回　人を殺し　身合に死すべきも
6 赦書尚有収城功　　赦書　尚お有り　城を収むるの功
7 九衢一日消息定　　九衢　一日　消息定まり
8 郷吏籍中重改姓　　郷吏の籍中　重ねて姓を改む
9 出来依旧属羽林　　出で来たり　旧に依りて　羽林に属し
10 立在殿前射飛禽　　立ちて殿前に在り　飛禽を射る

（大意）悪名高き長安の少年、酒場の前で商人から金を脅し取り、すぐその酒場で飲むという大胆さ。明け方明光殿での宿直から帰ると、散らばって松柏の茂る五陵に紛れ込み悪事を働く。百回も人を殺しているので当然死刑のはずが、戦場での功績があるため恩赦を受ける。町のうわさが一度静まってしまうと、役場の戸籍の名前を変えて別人になりすます。そして元通り羽林郎となって登場、天子の御前で飛ぶ鳥を射抜いて御意にかなう。

難解な部分もあり、主に李樹政注に従って解したが、徐注では、4を逃亡の様子と解し、7を「町に広まっていた恩赦のうわさが、ある日事実だと証明された」と解するなど、解釈の異なる点がある。ただ、大筋においてはあまり違いはないといえよう（なお、徐注は8の改姓の描写を、逃亡の際に使っていた偽名を再び元の名に戻すと解しているが、これは「重」の文字に拘泥しすぎたための誤りであろう。本名が書いてあったところを別名に改めたのが「重」であり、偽名が戸籍に反映されていたとは考えにくい）。

この詩は羽林郎となっている遊侠少年の無法ぶりを詠じたものであり、冒頭で「悪少」と表現することによって、少年像のブレは解消されている。以下、朝廷に勤務しながら裏で悪事をはたらく少年の様子を描写し、さすがに死罪になるべきところを過去の功績で許されたことを述べ、別人となってまた大手を振って羽林で活躍する様子を描いて結びとしている。悪人がのさばる様子を描き、特に最後の二句では、これからも同じことを繰り返すであろうことが暗示されて、非常に印象深い結びとなっている。

王建の作は遊侠少年に対する批判を中心にしており、前項で述べたように、張籍の作が正規の手続きを踏んだ羽林郎との比較を行っているのとは、やはりテーマそのものが異なっているといえるだろう。

（橘）